2015年度鳴門市人権地域フォーラム
テーマ　「ひとごと」から「わがこと」へ
～自己をみつめ、語り、人と人とがつながる人権学習～

■と　き　2015年8月5日(水)13:30～16:30
■ところ　鳴門うずしお会館
コーディネーター　A(藍住町立藍住中学校教諭)
パネリスト　B(鳴門市第一中学校教諭)
C(大阪府箕面市立萱野小学校教諭)
D(第19回人権を語り合う中学生交流集会運営委員)

≪司会者≫

本日の人権地域フォーラムにお招きいたしました講師の方々をご紹介させていただきます。おいでいただきました講師の皆様は、お名前をお呼びいたしますので、随時壇上の席へご移動くださいますようお願いいたします。

初めに、本日のフォーラムのコーディネーターを務めていただきます藍住中学校教諭 A さんです。続きまして、パネリストの皆様をご紹介させていただきます。（名前を呼ばれる毎に一人ずつ会場に向かって丁寧に一礼をし、壇上へ移動する講師の姿がある。一人一人が壇上に上がるたびに会場から大きな拍手がおこる）第19回人権を語り合う中学生交流集会運営委員　Dさんです。（拍手）大阪府箕面市立萱野小学校教諭　Cさんです。（拍手）鳴門市第一中学校教諭　　Bさんです。（拍手）

本日は、以上４名の講師の皆様に、「『ひとごと』から『わがこと』へ」～自己をみつめ 語り 人と人とがつながる人権学習～」というテーマでフォーラムを進めていただきます。なお、本日「テレビ鳴門」の撮影が行われております。パネリストの方々の語りなど、本日のフォーラムのプログラムの一部を後日放映いたしますが、会場の皆様との意見交換の場につきましては撮影いたしませんので、ご了承くださいますようお願いいたします。それではA先生、以後の進行につきましてよろしくお願いします。

≪コーディネーター　A≫

（元気よく）皆さん、こんにちは。（会場からも「こんにちは」声が返る）毎年様々な年代、様々な立場の皆さんが、パネリストとして思いを語っていただいております。今年度は、「鳴門第一中学校」の生徒会の皆さんが創ってくれた映像劇「スダチの苗木」という人権劇を観ていただきます。中学時代の同和問題学習が、人間として生き抜く力になっていく。そういう教育をめざして様々な場所で人権学習を積み上げてきました。この場もそうなんですけど、語りが語りを生む、人と人とのつながりの中で人間は解放されていきます。

（じっくりと）言葉の力を毎年実感するこのフォーラムです。今年も３人のパネリストの思いを受けて、様々な思いがこの会場にあふれ、共に生きるよろこび、学ぶよろこび、知るよろこび、つながるよろこび、そんな思いが広がり、人間の可能性や人間として生きるよろこびを体感し、実感していく、そんな時間になればと思います。

最初に「スダチの苗木」の映像を観ていただきますが、その制作者のＢ先生に人権劇にかけた思いを語っていただきます。（ニコニコしながら）共にこの劇を創ってくれた、出演してくれた中学生の皆さんが、前の席に座ってくれているのは、気持ちいいなあ。それではＢ先生、よろしくお願いします。（拍手）

≪パネリスト　B≫

（拍手に誘われ、立ち上げる）皆さん、こんにちは。（会場から「こんにちは」の声が大きく返る）「スダチ

の苗木」という、この題名そのものをお聞きになった方はたくさんいらっしゃるのではないかと思います。この原作である、文章として表現された「スダチの苗木」というのは、1994年、当時の文部省から発行された、道徳教育推進資料の中で教材として紹介されているものです。執筆者はここにおられるＡさんです。

私自身は、Ａさんとは前に勤務させていただいた中学校で何年かご一緒したことがあります。そこで、「スダチの苗木」という資料の内容についても知っておりましたので、より詳しくお話を聞かせていただく中で、劇として創らせていただきました。

おそらく読み物資料としての「スダチの苗木」を読まれたことのある人は、なんとなく違うと気づかれるかも知れません。違うという点は、それは同和問題についてです。同和問題をより深く掘り下げた内容として、今回のシナリオを創らせていただいております。何度も何度もＡさんと打ち合わせをする中で、Ａさんが当時大学時代に抱かれた思いをシナリオの中に入れさせていただいております。まずは映像をご覧ください。

【映像劇】

2015年度 鳴門市第一中学校 人権劇「スダチの苗木」

キャスト　鳴門市第一中学校生徒会本部役員

【画面は、静かにゆったりと流れていく京都鴨川の夜明け前の映像が続く中、人権劇のテーマ「葛藤の日々」「人間を信じること」「真実をみつめること」と字幕が映し出される】

【1本のスダチの苗木が大きく映し出され、ナレーションに沿う形で人権劇が始まる】

≪ナレーション(主人公)≫

父さん…、大学生活が終わろうとするあの頃、京都の下宿で父さんが植えてくれた、あの小さなスダチの苗木。植えられたばかりの頼りなさそうな姿は、今も心に刻まれています。

【画面は、土木作業現場で人の働く姿がしばらく続き、裸電球、初期の頃の電気炊飯器など、1970年代の一軒の家庭の様子へと変わる中、ナレーションが続く】

私の父は、日雇いの土木作業員でした。父は私たち４人の子どもを育てるため、働き続けました。けれども、雨降るだけで、たちまち仕事はできなくなり、その日の収入は途絶えてしまいます。

父は、生涯、財布を持たない人でした。その日の給料はすべて母に渡し、自分が自由にお金を使うことはほとんどありませんでした。夕食の時にわずかな晩酌をすることぐらいしか楽しみを持たない父、ただひたむきに働き続ける父。

父はどちらかといえば無口で、自分の気持ちをあまり語らない人でした。それだけに、私たち兄弟にこんなことを言った事は、良くおぼえています。

【家の中で、子どもたちと真っ直ぐに向き合いながら穏やかに、そしてしっかりと…】

≪父親≫

父ちゃんはな、みんなが使う道路をつくっているんだよ。みんなのために役立つ道路だ。

【当時に思いをはせるかのように、夕焼けを見つめる父親の後ろ姿が映し出される】

≪ナレーション(主人公)≫

父は自分の仕事に誇りを持っていることを伝えたかったのだと思います。

けれども私自身は、父の苦労に感謝をする一方で、厳しい労働の割に、収入の少ない父の仕事に対して、何か引け目のようなものを感じていました。汗と泥にまみれながら、黙々と働く父の姿が無性に悲しいものにさえ思えました。

【部屋の中で机に向かい、家庭環境調査票に書き込む両親の姿がある】

≪ナレーション(主人公)≫

私が子どもの頃には、学校から配られる家庭環境調査のプリントには、親の職業を書く欄がありました。

【父親は、ペンを手に取る。母親は、小声で父親に話しかけている。職業欄に「運転手」と書いている】

プリントを受け取ると、職業欄には運転手と書かれていました。 作業員の仲間を工事現場に運ぶため、マイクロバスの運転を引き受けていたからでした。

別の年には、その欄に農業と書いたこともありました。確かに父は、わずかばかりの米を育ててはいました。でも、それは家族が食べるだけ、育てたものなのです。

父は、マイクロバスを運転することや農作物を育てることだって、ちゃんと家計の助けになっているのだから、こういうことは嘘にはならないよと話してくれましたが、私はそうは思えませんでした。

そして、ただ自分は将来、はっきりと人に言うことのできる職業につきたい…、そう思うだけでした。

《1978年4月(大学1年)…京都での大学生活がスタートする》

≪ナレーション(主人公)≫

やがて…、私は、中学校の先生になりたいと思うようになり、京都の大学へと進学しました。

【下宿近くの下鴨神社が映し出され、大学の友人たちとの語り合いの場面へと続く】

≪友人1≫

今日の授業の内容って、俺にはよく分からなかったんだ。誰か説明してくれよ。

≪友人2≫

ああ、君は確か関東の出身だったよな。学校での人権問題の扱いがそれぞれの県によって違うっていうことは、お互い大学に入るまで、知らなかったもんな。君のところでは教えてくれなかったのか？

≪友人1≫

いや、まあ、そんなことはないけど。もちろん江戸時代の身分制度が、今だに偏見となって残っていることは知ってる。でも、普通、昔の士農工商の身分なんて、日頃、意識することなんかないだろう。あれこれ騒がないほうがいいんじゃないのか。

≪友人2≫

いやあ、そんな簡単じゃないって…。現に…、差別に苦しんでる人がいるからこそ、今日の授業があったんだろ。

≪友人1≫

なあ、君はそういう差別を受けた人から、直接話を聞いたことはあるのか？

≪友人2≫

うーん、そう言われるとなあ…。学校では、教えてもらったけど。就職差別とか、結婚差別。生まれた場所で差別されるなんて間違いだとは思っているよ。でも、あんまり身近な問題とは思ったことはないなあ。

【友人たちと、少し離れ、黙って話し合いを聞いている主人公の姿がある】

≪ナレーション(主人公)≫

いつもの私なら、どんな話題であっても、一緒に語り合っていたはずでした。しかし、人権問題の話となると、この頃の私は誰とも話せなくなっていました。 私が生まれた地域の人たちは、厳しい労働条件の仕事についている人が多かったのですが、子どもの頃は、そのことに特に疑問を感じることはありませんでした。中学２年のあの日までは…。

【回想場面、中学2年当時】

≪友人≫

なあ健ちゃん、おれ、この差別をなくすには学校の先生になるのが一番だと思う。健ちゃん、学校の先生にならないか…。

≪健司≫

（わけがわからないというように）治ちゃん、この差別って…どういうことだ？

≪友人≫

健ちゃん、知らんのか。俺たちのこと。

≪健司≫

俺たちのことって？

≪友人≫

健ちゃん、俺たちは、同和地区に生まれたことになってるんだよ。

≪健司≫

えっ…？それってどういうことだ。

≪友人≫

えっ？ああ、そうか。健ちゃんは知らなかったのか。あのなあ、俺たちの住んでる場所は、もともと差別を受けてきた地域なんだ。一番上の兄貴の結婚話が、急にこじれたことがあってな。相手の人はすごくいい感じの人だったもんだから、どうしてそんなことになったのかと、思い切って直接兄貴にたずねたことがあったんだ。そしたら…。

≪健司≫

お前の兄貴が話してくれたのか。

≪友人≫

ああ、初めて聞いた時は、ショックだった。もちろん話を聞いている内に、腹も立ったんだ。第一、俺自身だって、そういう目にあうかもしれないってことだろ。兄貴も俺も、何一つ間違ったことなんかしてないのに…。

≪健司≫

うん、治ちゃんは、正義感が強い、本当にいい奴だよ。

≪友人≫

でも…、兄貴の相手の人もひどく思い詰めたらしくってな。兄貴もそうだが、その女の人も結婚を、家族や親戚に反対されてすごく苦しんだらしい。兄貴自身は、その悩んでいる姿を見るのが、何より辛かったって言ってた。それで…、俺は、差別は、自分たちだけじゃなくて、あらゆる立場の人たちを不幸にするものだって分かったんだ。

≪ナレーション(主人公)≫

彼がなぜ、中学校の同和問題学習の時には、あんなに真剣に意見を言っていたのか。そして、自分たちの住む地域の人達は、どうして厳しい労働条件の仕事にしか就けなかったのか。この時、初めてその理由が分かったのです。父と母は、そのことを私にも、もちろん弟や妹たちにも、口を閉ざしていました。

私が部落差別について、父と語り合えたのは、私が教師になってからのことでした。

【話し合いに仲間に入ってこない健司を誘うように友人が声をかける】

≪友人2≫

森口？森口って…。どうしたんだよ。黙りこくっちゃって…。

≪友人1≫

おいおい、まさか、自分は部落出身だなんて言いだすんじゃないだろうな。

≪健司≫

（驚いたように）えっ？

≪友人1≫

何、びっくりしてるんだよ。冗談だよ。

≪友人2≫

腹減ったなあ。今日の昼ご飯、どうする？

≪友人3≫

実はこの間できたばかりのお勧めのラーメン屋があるんだ。案内するからそこへ行かないか。

≪友人1≫

お前のお勧めは、いつもラーメンだなあ。まあ、いいや。そこにしよう。

≪健司≫

ああ、そうだな。ここからは遠くないのか？

≪友人3≫

いや、すぐ近くだよ。たぶんみんな気に入ると思うよ。

≪ナレーション(主人公)≫

大学時代の私は、ひたすら自分が部落の出身であることを隠し続けてきました。そして、まるで他人事のように語られる同和問題を友人から聞くたびに…、胸が締めつけられるような想いに駆られました。

【下宿の前、下宿のおばさんと子どものやりとりが聞こえてくる(声のみ)】

≪子ども≫

お母さん、安田くんと釣りに行ってくるね。

≪おばさん≫

あんまり遅くならないようにね。それからね、この前釣りに行ってた所は、だめですよ。あの辺には行かないでちょうだい。

≪子ども≫

うーん、みんなと待ち合わせをしたんだけどなあ。

≪おばさん≫

でも、釣りができる場所は他にもいっぱいあるんでしょ。

≪子ども≫

仕方ないなあ。うん、そうするよ。じゃあ、行ってきます。

≪おばさん≫

行ってらっしゃい。

【子どもを見送り、玄関に入ってくるおばさん。そこで健司とばったりと会う】

≪おばさん≫

(健司を見つけるとニッコリして)あらっ、森口君。帰っていたの？午後からも授業があったんじゃないの？

≪健司≫

いえ、どうやら先生に予定が入ってたらしくて、昼からの授業は休講になりました。

≪おばさん≫

ああ、そうだったの。ちょうどいいわ。今から洗濯するから、洗う物があれば出しといてちょうだいね。

≪健司≫

(一瞬戸惑い、思い切ったように)あの…、「芳雄くんに行かないように」って言ってた釣りの場所ですが、どこか危ない所があるんですか。

≪おばさん≫

えっ？でも、森口君は、釣りなんか興味ないでしょ。

(少し困ったようなしぐさをしながら)ちょっと言いにくいんだけどね…。実は、芳雄がこの前に釣りをしてた所は近くに被差別部落があるのよ。私は、昔からここで生まれ育ったので、小さい頃、その辺りには行かないようにって言われてたの。だから、つい息子にも同じことを言ってしまったのよ。

でも…、森口君は、学校の先生になろうとしているんだから、こういう考え方は良くないって思うわよね、きっと…。

【一瞬、健司の表情が曇る】

≪健司≫

あの、おばさん…。

≪おばさん≫

どうかしたの？

≪健司≫

(おばさんに話そうと思った気持ちを抑えるように、気持ちを切り替え)いえ、わかりました。今、洗濯したいものを持ってきますから。いつも、ありがとうございます。

≪おばさん≫

ううん、いいのよ。その分しっかり勉強して、ご家族の期待に応えてあげてね。

≪健司≫

はい…。

【健司は洗濯物を取りに部屋へと引き返す】

≪ナレーション(主人公)≫

(夜のとばりの中で)学生生活、下宿先のおばさんにずいぶんお世話になりました。洗濯までしてくれました。どろどろに汚れた靴下が真っ白になって返ってきました。また、田舎に帰る時は土産まで持たせてくれました。おばさんはまるで母親のように私たち下宿生の世話をしてくれました。

そんなおばさんの姿と重ねて、父や母を思いながら、私は大学生活を送っていたのです。それだけに…、おばさんから不意に出た言葉は、本当につらいものがありました。

【その夜、下宿の部屋で机に向かいながら一人自問自答を繰り返す】

≪健司(独り言)≫

おばさん…。いつも親身になって僕らのことを考えてくれる。本当に…、あんないい人はいない。けれども…、さっき、おばさんが気にかけてくれた、僕の父さん、母さん、そして僕自身だって、おばさんの言ってた被差別部落の出身だということを知らない。

おばさんがそのことを知ったら、僕らのことをどう思うんだろう。僕の知る限り、僕の家族だって、もちろん、近所の人だって、他のどの地域に住んでいる人とも、何も違わない。そのことは、僕自身が一番よく分かっている。みんな…みんな、だれもが同じ人間同士じゃないか。

おばさんに、今、自分が思っていることをありのままに話せたら、どんなにいいだろうか…。もしかしたら…おばさんのことだから、分かってくれるかも知れない。

いや、しかし…、だめだ。おばさんは、子どもの頃から、ずっと差別意識を周囲から刷り込まれてしまっている。もし自分までが、おばさんに偏見の目で見られたらと考えると、とても言い出せない。

僕はこれまで、京都で出会った誰にも心を開くことができなかった。相談もできなかった。

この息苦しさは、なんだ。自分が部落出身だということを人に伝えることがこんなに難しいとは、中学の頃は思いもよらなかった。

僕ら子どものために、あんなに必死で働いて、働いて、働き続けた、父さん…、母さん。そして、気のいい弟や、心優しい妹たち。それなのに、就職といえば差別、結婚といえば差別。そんな理不尽な話を何度聞かされたことだろう。こんなことじゃあ、僕は、何のために大学へ来たのか分からない。

【夜、下宿の共同電話で、電話をかける健司(電話の向こうに中学時代の友人の声)】

≪友人≫

もしもし、あの、どなたでしょうか。

≪健司≫

（遠慮がちに）あの、夜分に失礼します。森口ですが。

≪友人≫

（驚いたように）健ちゃんじゃないか。

≪健司≫

（安心したうれししそうな声で）あれっ、ああ、治ちゃんだよな。元気にしてたか。

≪友人≫

（懐かしそうに）いやあ、珍しいな。でも、こんな時間にいったいどうしたんだ。

≪健司≫

ああ、持つべきものは友達とはよく言ったもんだ。治ちゃんの声を聞いたら、ちょっと気持ちが楽になったよ。

≪友人≫

（心配そうに）へえ、健ちゃん、どうしたんだい。何か嫌なことでもあったのか。

≪健司≫

（促されるまま、心の内にある思いを語り始める）いや。俺の周りはみんな、いい人ばかりだよ。だから、まあまあ楽しくやってるつもりだったんだが…ただ、差別の問題に対しては、分かっていない人が多いんだと思う。それなのに、周りの人に、自分の考えを、ちゃんと伝えられないんだ。自分は差別をなくしたいから、教師になろうとしてる。そんなことさえ、みんなに語れない。本音で語り合えた、中学校の頃の仲間が懐かしくって仕方がないわけだ。

≪友人≫

（健司の思いに寄り添うように）ああ、なるほど。そういうことか。確かにな。俺も似たようなもんだよ。健ちゃんも俺も、部落の出身だからこそ、差別を無くしたい気持ちは人一倍強かった。だから、差別をなくすためには、これからの社会を作る子ども達に関わる仕事が一番だ。それで、二人で教師になろうって約束して、卒業したんだよな。

ところがだ。高校に入ったら、俺の立場を知らない人ばっかりだったから、差別の問題についても、ほとんど話せなくなった。健ちゃんとは、別の高校に通ってたから、一人ぼっちになったような感じはよく覚えてるよ。

≪健司≫

（当時に思いをはせ、懐かしそうに）ああ、そうだった。治ちゃんと久しぶりに会ったら、そんな話になったよなあ。

≪友人≫

おい、覚えてるか？ほら、俺、中学校の同和問題学習の時間に、差別を他人事みたいにいう奴がいたんで、つい食ってかかったことがあったろ。で…、健ちゃんに、注意されたんだ。もっと相手を信じることが大切だって…。あの時は、健ちゃんの忠告を素直に聞けなかったんだけど…。

≪健司≫

（懐かしさの中で声を弾ませながら）ああ、そうだ。そうだったな。あの時は、正直ひやひやしたよ。正しさを振りかざして、一方的に相手をやりこめたら、相手は心を閉ざしてしまうぞって、話したんだよなあ。あの時、僕は相手の考えを変えるには、まず相手の心を信じることが大切だって思ったんだ。

でもな、今だから言うけど…、あの頃は、自分が言いたくても言えないところを、治ちゃんがすぱっと言うもんだから、僕もすっきりしたことがあったんだ。

≪友人≫

（楽しそうに）えっ？なんだ。そうだったのか。あーあ、なんか反省して、損したなあ。

でもな、あの時は、健ちゃんが間に入ってくれて、穏やかに話をしてくれたから、良かったと思ってるよ。(しみじみと)……なあ、健ちゃん。

≪健司≫

ん？なんだい？

≪友人≫

(じっくりと、健司の迷いに応えるように)あの時の健ちゃんの忠告をそのまま返すようになるんだけど。焦らず、じっくり腹をすえていこうな。

俺たちは、まだ教師にさえなっていないけれど…。今出来ることは、今の出会いを大切にすることだと思うんだ。相手にだって悩みの一つや二つはあるだろうから、そこに耳を傾けることも必要だろう。

大学での友人関係は、おそらく一生続くもんだし、お互いの信頼さえあれば、差別の問題についても語り合える時が来るはずだ。確かに、口で言うほど簡単なことじゃないかも知れない。でも、人間が平等だってことを伝えていくのは、相手が誰であっても、お互いが幸せになっていく道なのは、間違いないはずだろ。

それにな、俺たちが将来関わる子どもたちは、おそらく大人よりも、余計な偏見に毒されていないはずだから、きっと俺たちの気持ちも伝わると思う。なっ、俺たちは一歩一歩、自分自身が願っていた方向へと進んでるじゃないか。

≪健司≫

ああ、そうか…。僕は焦っていたのか。そう言えばこっちに来てから、友達の悩みなんか、考えたことも、なかったな。自分の悩みだけで精一杯だったから。

≪友人≫

おいおい、しっかりしてくれよ。この話は、中学の時にお前が俺にくれた忠告そのまんまだぞ。なあ、差別をなくすのは俺たちの一生の仕事だろ。まあ、かっこつけて言えば、天が俺たちに与えたもうた使命ってやつだよ。

≪健司≫

(感心したように、声が弾む)へー、使命か。治ちゃんは、うまいこと言うなあ。そう言えば、学校の先生になろうなって、二人で約束した時、わくわくしたんだ。 なるほど、そういうことか。よく分かった。徳島に戻ったら、また連絡するから。

≪友人≫

ああ、そうだな。いけね、おい、ちょっと長電話になったぞ。それじゃあ。

≪健司≫

ああ、またな。

【電話を切り、再び自問自答する】

≪健司(独り言)≫

そうか。僕が、治ちゃんにこうして自分の気持ちを語れるのは、治ちゃんのことを信じているからだ。京都で出会った友だちやおばさんに本当の気持ちを伝えられないのは、僕の心の中に、相手を信じ切れない想いがあるからなのか。

≪ナレーション(主人公)≫

私は中学生だったあの日、部落差別が他人事ではないと分かって、何か重い宿命を背負ってしまったように感じました。それは、まるで、自分の将来に暗雲が立ち込めているといった感じでしょうか。あの日のことは、今でも鮮明に覚えています。

でも、その内に、私の中で、少しずつ違う気持ちが生まれたのです。「今の悩みや苦しみは自分一人だけのものじゃない。だとすれば、この問題を真正面から語ることのできる、学校の先生になるのが一番いい。」そんなことを友人と２人で語り合ううちに、心の中に明るい光が差したような気持ちになったのでした。

【朝　鴨川のほとり。ゆったりと流れる鴨川をたくさんの鴨が泳いでいる】

≪ナレーション(主人公)≫

ここには、いろんな鳥たちが集まって来てる。みんな、仲良くやっている。鳥同士、お互いに、傷つけ合うことがないからだ。本来は、人間だって、生まれた国や場所が違っても、肌の色が違っても、みんな同じように大切なはずだ。みんながお互いのことをそう思えたら…どんなにいいだろう。

《1982年3月(大学4年…京都での大学生活が終わろうとしている)》

【下宿の庭、同級生が迎えに来た父親と家路につこうとしている】

≪学生1≫

みんな、ありがとうな。森口も元気でやれよ。

≪健司≫

ああ。

≪おばさん≫

卒業おめでとう。さようなら。

≪学生1≫

失礼します。

【学生1は後ろにいた父親(背広姿)と共に黙礼し去っていく】

≪おばさん≫

(その姿を見送りながら)みんな行く先が決まって本当に良かった。森口君も、今日出発するんでしょう？ 毎年、そうなんだけど、なんだか嬉しい気持ちと淋しい気持ちがいっぺんにやって来る感じね。徳島に帰っても頑張りなさいね。

≪健司≫

おばさん、今まで本当にありがとうございました。今日、父がお伺いすることになりますが、よろしくお願いします。

≪健司≫

(２人の後輩の方を向いて)ああ、そうだ。みんな。僕の部屋には、大した荷物も残っていないから、手伝わなくてもいいよ。自分一人で積めるから…。

≪後輩1≫

先輩、何言ってるんですか。今日で最後のお別れじゃないですか。ちゃんと見送らせてくださいよ。

≪ナレーション(主人公)≫

私の通っていた大学は、裕福な家庭に育った学生が多かったように思います。友人や後輩の親たちは、下宿に訪ねてくる度に、立派なお土産を持って来ていました。そのことに引け目を感じていた私は、自分の家族について後輩たちに話すことをできるだけ避けていました。できれば……、この日、初めて訪ねてくる父を、誰にも会わせたくない。そんな風にさえ、思っていたのです。

【玄関先に、健司の父親が立っている。いつも見慣れた作業着のジャンパー姿だった】

≪父親≫

(丁寧に一礼しながら)あの、今日は。初めまして。森口と申します。

≪健司≫

父さん…。

≪父親≫

ああ、(健司の方を向き)健司、引越しの荷物はできたのか。

≪おばさん≫

(温かな笑顔で)ああ、森口君のお父さんですね。こんな遠くまで、ようこそいらっしゃいました。あの、

すぐにお茶でも入れますから、お入り下さい。（後輩に向かって）それじゃあ、みんなは荷物の積み込みを手伝ってあげてね。

≪後輩1≫

（元気よく）分かりました。任しといてください。

≪後輩2≫

先輩、先に部屋に上がってもいいですか？

≪父親≫

（もう一度丁寧に一礼しながら）皆さん、ありがとうございます。あの…、息子が、本当にお世話になりました。

≪おばさん≫

いえ、森口君は、本当に頑張っていましたよ。晴れて４月からは、先生になるんですね。おめでとうございます。

≪父親≫

ありがとうございます。その…、お礼にと言ってはなんですが、実はスダチの苗木を持ってきたんです。

≪健司≫

（驚いたように大声を出す）えっ？父さん…。どうして…。

≪父親≫

スダチは徳島の名産なもんですから。こちらの庭の隅にでも、植えさせて頂いてもよろしいでしょうか。

≪おばさん≫

（笑顔で）ああ、ありがとうございます。それじゃあ、お願いしてもよろしいですか。

≪父親≫

分かりました。（健司を振り返り）健司、車にスコップと苗木があるから手伝ってくれないか？

【健司は、恥ずかしさと、情けなさで顔の表情が曇っている。うつむいていたままで動かずじっとしている】

≪父親≫

（健司の様子を見つめ）……。

【健司の気持ちを察した父親は、それ以上、健司に話しかけなかった。父親は、黙って、車の荷台から、スダチの苗木とスコップを取ってくる。庭の一角に穴を掘って、1人で黙々と苗木を植えている】

≪ナレーション(主人公)≫

（しみじみと）これまで訪ねて来た後輩の親たちは、皆高価なお土産を持って来ていたのに…。私の父親のお土産は、スダチの苗木だなんて…。私がとっさに感じたことは、作業着のままで訪ねてきた父を見て、下宿のおばさんは、そして後輩たちは、父のことをどう思ったのだろうかということでした。子どもの頃に抱いていた、父の仕事を恥じる想いがよみがえったのです。私の父は、背広を着て会社勤めの日々……。やむをえず、後輩にそう話したこともありました。

父の仕事が、日雇いの労働者とはどうしても話せなかったのです。おそらく、父も、私の気持ちに気づいたのでしょう。

≪父親≫

（スダチの苗木を植え終えて）ああ、お待たせしました。それでは、そろそろお暇いたします。

≪おばさん≫

（父親のあいさつに対し、戸惑ったように）あの、でも、もっとゆっくりとして下さればいいのに…。

≪父親≫

（おばさんの言葉に丁寧に）本当にありがとうございます。……。それじゃあ、健司。帰ろうか。

≪健司≫

（ぶっきらぼうに）……。うん。（おばさんや後輩たちに向かって）それじゃあ、失礼します。

≪後輩1≫

先輩、お元気で…。

≪後輩2≫

仕事が落ち着いたら、僕らが卒業するまでに、訪ねて来てくださいよ。

≪健司≫

（感謝の思いを込めて）ああ、ありがとう。

≪父親≫

失礼します。

【画面は徳島県の吉野川の映像へと変わる】

≪ナレーション(主人公)≫

私が、大学で教員採用試験の準備をしていた頃のことです。

【徳島県内の病院の廊下で、健司の母親と妹たちが話している】

≪妹1≫

（心配そうに）ねえ、お母さん。お父さん、本当に大丈夫なの？

≪母親≫

うん、（病室内のベッドで静かに眠る父の姿が映し出され）今は静かに眠っているけど…。お医者様は、しばらくは絶対に安静だって…。

≪妹2≫

そう…。お父さん、ここの所、ずっと働き通しだったから…。

≪母親≫

そうね。お父さんは、現場でみんなに頼られっぱなしだったからね。おそらく無理がたたったんだと思う。あの…、お父さんがさっき寝付く前にね…。健司には、自分が入院したことを絶対に連絡するなって言ってたの。連絡したら、きっと飛んで帰って来るはずだからと言って聞かないのよ。自分の入院のせいで、勉強の邪魔だけはしたくないって、何度も念押しするもんだから…。

≪妹1・2≫

（父親への心配と、兄を思いやる父の言葉に言葉をなくす）……。

≪ナレーション(主人公)≫

大学時代、ほとんど徳島に帰っていなかった私は、卒業してから初めて、父が病に倒れて、入院していたことを知りました。

≪健司≫　（精一杯の思いを込めて）父さん…、ありがとう。

【雨の日の京都の下宿が映し出される】

≪ナレーション(主人公)≫

私はその後も、結婚、子どもの誕生といった人生の節目節目に、京都の下宿を訪ねました。

【健司が下宿を訪ねた時の回想の映像】

≪おばさん≫

（優しく）ご家族の皆さんはお元気ですか。お父さんの持ってきてくださったスダチの苗木は、今も立派に育っています。花はまだ咲きませんが、あの木を見るたびにあなた方のことを思い出します。

≪ナレーション(主人公)≫

下宿を訪ねるたびに、いつも優しく語りかけてくれたおばさんは、すでに亡くなられていますが、スダチの白い花が咲く頃になると、今でも私は、父が植えたあの苗木のことを思い出します。

映像終了

≪パネリスト　B≫

人権劇の映像をご覧いただきありがとうございました。（会場から大きな拍手）前に人権劇に出ていた子どもたちが座ってくれています。よく見れば、人権劇の画面に出ているのと同じ顔だとか。（会場から明るい笑いが起こる）シナリオは、私がＡ先生と話し合いをしながら書かせていただきましたが、演じてくれたのは、鳴門市第一中学校の生徒会役員です。今日、全員がそろっているわけではありませんが、生徒たちの感想等も、また、聞いてやっていただければと思います。（鳴門第一中学校の生徒たちに向かって）大丈夫だね。（生徒のうなずく姿がある）Ａさんのお父さんが大丈夫と言っていますから。

（会場に明るい笑いが溢れる中、少し改まった表情に返り）私自身の思いをここで改めてお伝えする時間もありませんし、劇の中で、Ａさんと夜間電話した時の治ちゃんのセリフに、私自身の伝えたいことは入れさせていただきましたので、ここで私の時間は置かせていただいて、また質疑応答の方でお話しする機会もあろうかと思います。ありがとうございました。（拍手）

≪コーディネーター　A≫

（しみじみと）ありがとうございました。一緒に京都に３月に行ったんですけど、映像に出てきた京都の下宿での最後の日に、父親が初めて京都の下宿に来たんですけど、その時、大学の後輩たちに父親の姿を見られたくない、そんな卑屈な当時の思いをＢ先生に語りながら京都から帰ってきました。

観ていただいた映像劇の中でも見事に演じられていますが、私には中学時代に、中学校の教師になるという夢がありました。そんな夢を語り合う仲間がいたことが、私の大きな財産となっています。私は、中学校の教員になって本当に良かったと思っています。それは、この教師という仕事が、私を大きく変えてくれたからです。教師になった頃の私は、父親の仕事がずっと恥ずかしかったんです。でも、私が教師として出会った子どもたちは違う。私と同じような状況にいる子どもたちが、素直に親への思い、親への感謝を口にする。そして、その思いを素直に綴ってくる。私は、そんな子どもたちにしっかりと応えることにできる教師になりたいと思いました。

今、私は藍住中学校で勤務しています。30年前にも藍住中学校に勤務していました。当時も必死で同和教育をしました。当時の子どもたちは、私にこう言いました。「何で、先生は同和問題のことばかり一生懸命するんですか？」「何で、そんなに同和教育をするんですか？」30年前の私は、「俺のことや。俺が同和地区出身や」とは言えませんでした。

（力強く）でも、この営みの中で、生き方が変わる。人生が変わる。そして、私の出会った子どもたちが、私の生きがいになり、生きるよろこびになり、私の生きる希望になりました。（うれしそうに）そんな思いの中で、このフォーラムとも10年余りずっと関わってきました。

2004年にこのフォーラムを実施した時、前に座っているＣ君が大学生（大阪教育大学１年）だったんですけど、彼にここでしゃべってもらいました。今、小学校の先生になっています。大阪で子どもたちと幸せな生活をしっかりつくっています。やっぱり、そこによろこびを感じます。

出会ってきた子どもたちが、それぞれの立場で誇りとよろこびを持って真っ直ぐに生きている。いろんな価値観を担いながら堂々と生きる姿に、私はやっぱり応えていきたいと思います。私は、教師になって私の人生が変わりました。

そのきっかけとなったのが、今日もこの会においでいただいていますけど、佐藤文彦先生、佐藤先生ご自身はもう亡くなっておられますけど、そのお連れ合いである佐藤芳子先生が、今日この会場においでいただいています。私は、佐藤文彦先生との出会いの中で、「子どもとの信頼と尊敬の絆の中で、はじめて教育は成立する」ということを、徹底的に教えていただきました。

Ｃ君にこれから話してもらうんですけど、Ｃ君のご両親は部落差別の壁を乗り越えて、すばらしい家庭を

築かれました。そして、Ｃ君を育ててきました。Ｃ君のご両親が結婚差別を乗り越えていく、大きな支えとなったのが、佐藤文彦先生、芳子先生のご夫妻でした。その両親の生き方を受け継ぐように、彼は中学、高校、大学と部落問題と向き合う生き方を貫き、今、小学校の教師になって必死で頑張っています。

佐藤先生の思い、両親の思い、部落を解放していくという命のバトンをしっかりとつないでいる彼の思い、彼の生き方に学んでいきたいと思います。それでは、Ｃさんです。お願いします。

≪パネリスト　C≫

はじめに

（元気よく）改めまして、今、大阪府箕面市萱野小学校というところで５年生を担任しています、Ｃと言います。よろしくお願いします。

今、Ａ先生が言ってくれたように、約10年前にこの鳴門市人権地域フォーラムに声をかけていただいて、その時のことは今も覚えているんですけど、そこから10年経っても、こういうふうに地域の方、市民の方、また中学生とか、教職員を対象に、こうして人権のことを考える文化を創っているこの鳴門市というところを、改めてすごいなあと思います。私が今働いている所でも真似をしてみたいなと思います。

このチラシにも、「こころをまんたんに～自分たちの世代だからこそ作れる人権教育をめざして～」と書かせてもらっているんですが、まず、この「スダチの苗木」の人権劇を観させていただいて、本当に、率直に中学生の真正面から部落問題を学ぶ姿、演じる姿に刺激をもらいました。

大阪でも人権教育に頑張っているという意識があると思うんですが、人権教育の勉強の時間がなかなか確保できていなかったり、どんどんどんどん若い先生が入ってきて、世代交代になって、なかなか真正面から部落問題を取り組む時間が取れないことを実感して、苦労している姿があります。本当に、こうして部落問題学習に取り組む姿というのは一つの展望なので、是非、僕の校区の中学校の先生とかにも伝えていきたいなと思います。

こころをまんたんに、今伝えたいこと

今日、Ａ先生の生い立ちをテーマにした劇を観させてもらって、時代背景をみると、1980年代、僕が生まれたのが1985年なので、僕が生まれる前のことが描かれているので、「ちょっと前のことかな」という印象も受けがちなんですが、やっぱり、あの映像の中で起こっている差別の現実というのが、今の自分たちこの社会につながっていることもあるので、共感できるところ、自分なりに学んだことを、今日は皆さんと考えていきたいと思っています。

「こころをまんたんに」と書いていますが、「心のエネルギー」っていうのは何かなと考えた時、僕は「自尊感情」とか「自分は自分でいいんだな」と、いいところも悪いところも含めて、このＣという人間はこの世の中に１人しかいないわけですから、誰かに粗雑に扱われるとか、僕の人生を踏みにじられる筋合いは絶対ないというところ、自分は大切なんだなと思えるエネルギーというのが、この「こころをまんたん」にする原動力だと思うんです。

だから、今の映像を観ていると、そのエネルギーを奪うのは何なのかと考えた時に、Ａ先生の生い立ちの中にあっては、部落差別、これがあることによって「自分は自分でいい」と思えなかったり、今年度に入ってから、中学生がいじめによって自殺するという痛ましい事件が起こったんですが、いじめも一緒だなと思います。やっぱり、「自分は自分でいいんだな」と思える生き方ができない中で、「自分はもうどうでもいい」と思ってしまうことが、あってはならないことだと思います。

それと同時に、劇の中で、主人公を演じられた中学生の顔が上がっていくところ、自分のことが語れなくてどんどん気持ちが沈んでいく中で、顔の上がる瞬間というのは、「治ちゃん」という仲間の存在があったからこそだと思います。これもやっぱり、「こころをまんたん」にしていくためには、自分１人だけではな

くて、仲間の存在が必要なんだなと改めて思いました。

ここで、今日は、自分はどういうふうに人権教育、同和教育の中で「こころをまんたん」にしてこれたのかなということを含めて、そんな自分が、今、自分の目の前にいる子ども達に対して、どういうことにこだわって生きていきたいのか話をしたいと思います。

部落問題との出会い　小学校の時…

まず、今、自分が先生になろうと思ったところを含めてですが、部落問題との出会いというのが、僕の中の大きいものとしてあります。覚えている範囲でいうと、一番初めは小学校の時です。(照れくさそうに)今日、両親も来てくれていまして、参観日みたいな気がして、子どもたちの気持ちがわかるんですが、(会場から温かな笑い)両親が受けた部落差別のことを含め、これはお前の問題にもなってくるんだと言ってくれたわけです。

これが、大学生とか教師になるにつれて、自分の子どもにそのことを語るということが、どれだけエネルギーがいることかというのが、まだ僕は親になっていないので、本当の意味での実感はまだないんですけど、ちょっとずつわかるようになってきています。

中学校の全校集会で

初めて聞いた当時は、自分はまだ小学生ですから、そんな深い願いの中で言われていたということは、みじんも思っていないので、「ああ、そうなんや…」くらいに思っていました。だって、自分が部落出身だということで学校に行ったら、仲間外れにされるとか、石を投げられるとか、そういうことはないので、「ああ、まあ、そうなんや」くらいにしか思っていなかったんですね。

僕の場合、Ａ先生の学生の頃とは時代背景が違うかもしれないんですけど、そんな中で、中学校の時に、同和教育・人権教育の中で、自分のことを語るという機会がありました。その語った１年半くらい前に、友だちの家の近所に住んでいるおばちゃんが、僕の帰った後に友だちのところに来て、「どこの子だ」みたいな話をして、友だちが「どこどこから来ている子だよ」という話をしたら、「遊ばん方がええよ」と言われて、僕たちは鴨島第一中学校でしたが、その友だちが全校集会でそのことへの思いを語るんですね。

その語りを受けて、僕は自分の問題でもあるので、自分も語りたいということで語りました。その時に、はっきり言って、自分が語ったことによって、その後、人権について何人か意見発表した後、フロアの中学生たちが、自分の意見を言うという時間を取っていたんですけど、そこで、どんどんどんどん自分の意見を語ってくれるんです。

それまで、自分の中で、自分の取り柄というか強みってなんだろうというのは、全く分からなかったんです。勉強もできないわけではないけど、そんなにすごくできるというわけでもない。僕は野球をしていましたが、野球もある程度できるという中で、「何が自分の強みなんだろうな」ということで、自分のアイデンティティとして迷った時に、自分は、この部落問題を自分のこととして語ることで、これだけの子が応えてくれる。仲間がつくれる。これこそ自分の持ち味なんじゃないかな、自分がこだわっていくことじゃないのかなと思いました。

高校時代　人権部の活動と江口いとさんとの出会いを通して

そういう中で、僕は川島高校に進学します。そこで人権部というのがあったので、そこに入って活動しました。中学校の時には、部落問題に関わるということは、これだけ認めてくれて、これだけ仲間がいて、差別なんて絶対怖くないと思っていたんですが、高校生になって初めて、徳島県下のいろんな地域の高校生たちと語り合う中で、「そんな現実がまだあるのか」と思いました。自分よりちょっと年上の先輩が、差別体験を語ってくれるんです。自分がその場におったら何ができるかということを考えました。

僕は、A先生ほど悩んだということはなかったかもしれませんが、母校で、「わざわざ、差別差別というからややこしくなるのと違うかな。それなら、自分たちのクラスで部落のことを言ってくる人はあまりいないし、それだったらわかる人とだけに話をして、そんなにわざわざ言うことはないのかな」と思っていた頃に出会ったのが、今の愛媛県四国中央市、土居町の江口いとさんという詩人の方でした。

江口いとさんの講演を聞きに行く機会がありまして、そこで、「私は差別から逃げるのではなく、差別をにっこりと笑って迎えることにしました」という語りがあったんですね。「自分の生き方というのは、こういう皆さんの前で語ることで、皆さんの心の中に、部落解放という心の種をまいて、願わくはその種の花が咲いて、部落差別がなくなっていくのを目指していきたいと思います。」というような話を聞いた時に、この生き方ってかっこいいなあと思いました。

それまで漠然としたものだったのが、自分も誰かの心の中に種をまく生き方をしたい、その生き方をするには何ができるかなと考えた時に、学校の先生というのは、今までも自分たちにそういうことをしてくれていたし、自分がこれからできることは、仲間をつくっていくことがそういうことではないかなあ、そういう仕事がしたいなあと思いました。

そこで大学に行くんですが、やっぱり大学に行ったら行ったで、映像と同じような、決して差別をしようとして言っているわけではないんですが、例えば、部落問題の講義が終わった後に、その部落問題のレポートの話になったりすると、「お前、書いたか？」「めっちゃ一生懸命書いたわ」「そんなに一生懸命書いたら、お前のことを部落だと思うんと違うか」そんなことを言いながら笑いを取っている現実があるんです。

でも、その子らは、決して、部落の人を馬鹿にするとかという感じではなくて、本当に無意識に言っている。そして、明らかにわかることは、「今、この教室の中には、部落出身の人はいないだろうということを前提に話しているな」ということです。やっぱりその中で「それは自分のことなんだけどな」と思いながらも言えなかったことというのは、劇の中ですごく共感できる部分です。

大阪の小学校に勤務して…　出会った親子との関わり

そういういろいろな学びの中で、今、こうして先生として立たせてもらっているんですが、今、自分が勤務している萱野小学校という所は、校区に同和地区のある学校です。

僕が初めて勤め出したのが３年前になります。その時に６年生の子どものお父さんと話したことを話させてもらおうと思うんですが、自分は、先生になったからには部落問題学習をこだわってやると、特に社会の学習と連携してやり始めたら、歴史のことと、部落問題のことをやっていくという中で、ある日のこと、同和地区から通ってきている男の子が僕の所に来て、「先生、僕の地域って部落なの？」と聞いてくるんです。「その話し、誰がしたの？」という話をしたら、「昨日、お父さんと話をした」と言ってきましたので、どんな話をしたのか聞くと、「解体新書」の杉田玄白の勉強をした後で、内臓などの解剖をしたのは差別されていた部落の人だったという話をお父さん知っているかと家で言ったら、お父さんが「その差別されていた人というのはお前のことでもあるんだ」と話してくれたと言いました。この子の話を受けて、こだわって学校の先生が発信することも大事だということを実感しました。

それでは、この子の気づきを、小学校の中で最後の６年生として、どういうふうに子どもの中で、学びとして残して、中学校に送れるかなと考えます。やっぱり、自分の経験とかも含めて、今の子どもたちに持たせたい力というのが、部落差別というのは、今、本当にあいまいな所で、「うわさ」であったり「評判」「風評」というところで判断されたりする。それは、部落問題だけではなく、他の問題にも関わることなので、この「うわさ」ということをテーマに授業をつくって、地域の保護者の人にも来てもらって、話をしてもらいました。

最初は子どもたちも「そんな差別があるのは嫌やなぁ」とか言っていたんですが、当事者の人の、「残念ながらそんな差別は現実にある。でも、差別がいくらあっても、仲間の存在があったら何も怖くない。だか

ら、みんなも中学校に行っても仲間をつくってほしい」という語りの中で、そのお父さんと話をしたという子が、「自分は、中学校に行ってもぶれない、どんなことがあっても変わることのない、今の仲間を大事にしていきたいし、これからもつくっていきたい」という姿が見えました。

僕は、彼が卒業してから卒業アルバムを取りに来た時に、「時間があるから先生と話をしよう」と言って、自分の生い立ちなども話をしました。今年も祭りで会った時に、「僕は地域を大事にしていく」という、今、高校生としてやっている彼の姿が、僕の中では、年も近いので、差別の問題については教え子というよりは同志としてやっていきたいと思っています。

今、めざしていきたいもの

この後、質問があると思うので、今は、こういう形で、大阪で先生としているんですが、徳島の人たちからは、「泰治、早く帰ってこい」と言われるんです。自分は、この人権教育・同和教育の中で大事だなと思う力というのは、やっぱり自分の心を「自分は自分でいいんだなあ」と思えること。こういうことを思ったら、絶対に他者に対して大事にできると、逆に、自分の心が雑に扱われていたら、他人に対しても、「こんなしんどい思いをしているのに、なんでお前いい思いをしているんだ」ということで、根拠のないことを理由にして傷つけたり、攻撃したりするということがあると思うので、やっぱり、この自分が大事にされるということ、同時に他者も大事にするということ。

そういう中で仲間をつくっていって、どんな場所にいても、自分の仲間ってやっぱりいるんだなあ、自分と同じように考えてくれる、人を大事にする人っているなあということを信じてつながっていく力、こういうことが大事だなと思います。

僕には、大阪にもそういう仲間がたくさんいるし、地元に帰って来ても仲間がたくさんいるし、すごく恵まれているなと思います。とりあえず、自分だけにおさめるのではなくて、そこから、江口いとさんみたいに、自分にできることとして「こころをまんたん」にしていきたいなと思います。この後、皆さんの声を聞かせてもらいながら、また、自分のことを語れたらと思います。よろしくお願いします。(拍手)

≪コーディネーター　A≫

ありがとうございました。(ニコニコと)どうでしたか？参観授業は…。(会場から温かい笑いが溢れる中、しみじみと)うれしいですね。この教育の可能性とよろこびをやっぱり実感します。

Ｃ君の話の中に、先ほどの映像劇「スダチの苗木」の登場する「治ちゃん」のことが出てきましたが、その治ちゃんは実在の人物です。私が中学２年の時、同和対策特別措置法の取り組みとして、地区の学習会が始まりました。その学習会で勉強する地区の仲間が14～15人おりました。そこで、友人の治ちゃんが、「健ちゃん、学校の先生にならんか。この差別をなくすのは学校の先生になるのが一番ええと思うんや」と思いを語ってくれたんです。それで真っ直ぐに教師になったかというと、２人とも揺れているんです。違う方向も考えたりしたんです。でも、やっぱり部落問題と向き合う生き方がしたいという願いが、互いの生きる指針となっていきました。彼は今、高校の教師になっています。私の一番の相談相手でもあるし、私の娘の大学進学のことで相談に乗ってもらったこともあります。私たち家族にとって、大切な大切な仲間です。

(力強く)昨年の「第19回人権を語り合う中学生交流集会」で、この後、話してもらうＤさんに、中学生にメッセージを届けてもらいました。今年も、先月「第20回人権を語り合う中学生交流集会」があって盛り上がったんですけど、昨年もすごかったんです。それは何かと言えば、彼女が小豆島の仲間と共に語った思いが、会場の中学生の思いを引き出していく。語りが語りを生んでいく集会につながっていったんです。

その語りの中には、今まで、「このことは誰にも話すことはない」と思っていたことが言える。ずっと「マイナス」に思っていたことが、そうじゃないということがわかる。人って変われる。こんなに生きる力がわく。こんなに家族を大事に思える。こんなに仲間をいとおしく思える。この仲間と出会えたことを誇りにす

る。そういう人と人とのつながりが生まれていく学びの場です。
(パネリストのＤさんに温かいまなざしを送りながら) １年前を思い出しながら、この後話をしていただいたらと思います。昨年の「人権を語り合う中学生交流集会」の記録集がまとまっているんですが、読み返す度に力がわいていきます。今日も、そういうつながりをつくっていく時間になっていくと思います。それでは、Ｄさん、いきましょうか。よろしくお願いします。

≪パネリスト　D≫

部落差別との出会い

こんにちは。香川県の小豆島から来ました、Ｄと申します。よろしくお願いします。自分が部落差別とどのように出会ったのかとか、今していることとか、部落差別と出会って、どう向き合っていこうと思うようになったのかなどお話していこうと思います。

私が部落差別と出会ったのは、小学校６年の時です。私の行っていた小学校では、小学校６年生の時に、立場学習をする前に「親子の集い」といって、両親から自分の思いを子どもに伝えてもらうということをやっていたみたいなんですけど、自分は、その時の記憶は全くなくて、その時の担任の先生に聞いたら、「あんたの親、ちゃんと言っていたよ」と言ってくれていました。

その後の、６年生の卒業旅行みたいことで、修学旅行のコースとは違うんですけど、京都・奈良・大阪と、先生たちと、同級生のもう１人と、家族のみんなで行って、その時に、はっきりと覚えているのが、「水平社博物館」に連れて行ってもらったことです。今もはっきり覚えています。その時が、自分と部落差別との出会いでありスタートだったのかなと思います。

中学校の全体学習、突然に語った「私、部落出身なんです」

中学校に上がったら、被差別部落云々、部落差別でどうこう言われるわけでもなく過ごしていたんですけど、Ａ先生が私の学校に来てくれて、全体集会という形で全校生徒が語り合う人権学習を開いてくれて、その時に先生の教え子の方、２人を連れて来てくださり、いろいろしゃべっていただいて、自分も最後の、後５人とか、後３人という時にパッと手を挙げて「私、部落出身なんです」と言いました。

その時には、そこに同じ地区の先輩後輩もたくさんおったのに、その同じ地区の人たちのことは全く考えずに、ただ、自分が手を挙げて自分が言いたいと思って言っただけでした。そこで、「自分がもっともっと頑張っていかな」と思いました。

私はその時、学習もしていないし、何にもしていないし、ただ立場宣言しただけで、これからが本当のスタートだと思えたので、とりあえず、自分の住んでいるところを知ってもらおうと思いました。

学習会というのがあって、先生も来てくれていたし、小学校とか中学校の生徒が集まりというのがあって、一番思ったのが「何でこの地区だけが、勉強、勉強と言って、先生が来てくれるのか」ということです。そんなふうに先生が勉強を教えに来てくれるっていうのは、あり得ないでしょう。だのに、「今日、勉強せなあかんのや」という気持ちや、小学校の時からスポーツもしていたので、学習会のある日にはそのスポーツの練習に遅れるし、「何でうちの地区だけ勉強勉強って言われてせないかんのや」と思っていました。

中学校１年で立場宣言をして、いろいろな先生の講演会とか、仲間ができるからと先生に言われて、同じような立場や思いを持っている中学生のたくさん集まる会とかに連れて行ってもらったことが、今の自分になった一番の基になっているかなと思います。

高校時代　届かなかった高校の先生への思いと先輩の作ってくれた語り合う場

高校では、正直言って、そんなには「部落差別」「部落差別」と言って、高校の先生が、「やるぞ」「やるぞ」と言ってしてくれた覚えはないです。こっちから、「先生、部落差別のことをもっとやって…。もし、

わからんことがあったら自分も調べてくるから…」と言ってもやってくれず、高校の３年間言い続けたんですけど、できませんでした。

一方で、住んでいる地区では、２歳先輩の人が全国高校生集会に行って、高校生が語り合う場を持っているというのを聞いて、帰って来て、すぐに立ち上げてくれたので、それには参加させてもらって、今はその会が名前を変えて、「いたんこの会」ということで自分と後輩たちとでやっています。

なかなか、小豆島は島なので、高校を卒業したら島を出て、高松や大阪方面に行ってしまう子が多いので、みんなでそろって活動ということはできていないんですけど、一緒にやってくれている後輩と細々と、人数が少なくてもやっていかなければならないことだし、絶対に潰したらいけないことだと思ってやっています。

父のこと　職場のこと　今、私の頑張ろうとしていること

ここで、内輪の話になるんですけど、自分の父親のことを話させていただこうと思います。自分の父親は部落出身で、ガンコでちょっと意固地な父親なんですけど、父親に、今日のことははっきり言って、話して来てはいません。母だけに、「こういうところでこんな発表するから行ってきます」と言って、ここに来ています。

中学校の時に、担任の先生が家に来てくれて、「お父さん、部落差別の勉強をするけどいいか」と言ってくれた時に、覚えている限りでは、そっけない返事だったなと思っています。父にこういう部落差別の問題の話をとか、こういう会で話す機会を与えてもらったんだと言うと、「ああ、そう」「どうぞ」とか、本当に父親は「タニンゴト」のように、「寝た子を起こすな」という考え方の父で、多分、一番最初に自分が頑張って頑張って話をして、解放運動で立ち上げていかなければならないのは、私の父親かなと今は思います。

こんな父なんですけど、父の仕事のことはあまり友だちにも言わず、黙りこくって他人の話を聞くだけです。そっちの友だちはお父ちゃんがサラリーマン。こっちは役場勤め。「あんたは？」と振られて、「ちょっと違う話をしようか」とはぐらかしたりしています。

父の仕事が恥ずかしいとかいうのではなくて、…やっぱり父親が恥ずかしいのかな…。他の所でどう言っているのかわからんけど、小豆島では「土方」って言っているんですけど、顔を真っ黒にして汗かいて帰って来て、そんな父で友だちには言えないけど、自分はそんな父をすごい頑張っているなと思うし、ありがたいと思います。

今の一番の自分の目標というか頑張らなければならないことは、もちろん父を解放していくことに頑張らなければいけないし、周りの友だち、職場の同僚である先輩後輩に、もっともっと、部落差別のことなど伝えていかなければと思っています。

まず、自分の職場の人に知ってほしいのは、自分は看護師をやっているんですけど、患者さんは、１人の人間が病に倒れてしまって、寝ているというだけなんですよね。自分と変わらない人間なんです。自分の勤めているところは、その人間である患者さんを全然人扱いしない。この間も、看護する中で、先輩だけど怒りました。「人やで…。人間やで…。血が通っているんやで…」そう言っても言っても変わりません。

私の大きな目標としては、自分の父の解放運動と、職場の先輩後輩の意識というか、意識というのはなかなか変わらないと思うけれど、ちょっとずつでいいから、患者さんを、同じ人間で、この人にも気持ちもあるし、権利もあるんだということを伝えていくことかなと思います。すみません、ご清聴ありがとうございました。（拍手）

≪コーディネーター　A≫

看護師として、患者さんと向き合う職場でいろんなことを思う。また、家族への思いもある。一番大事なのはやっぱり身内ですよね。

私が、道徳の読み物資料「スダチの苗木」を最初に書いたのは、この鳴門第一中学校が演じてくれたこの

劇の内容です。実は、最初に題名としてつけていたのは、「スダチの苗木とキンカンの苗木」でした。父親は、京都の下宿に、スダチの苗木と共にキンカンの苗木も植えています。

その京都の下宿を訪れる度におばさんは、「お父さんを誇りにしてあなたは生きるのよ」と私を諭すように、「お父さんが植えてくれたスダチは花が咲かないけど、キンカンは実をつける」と話してくれました。そのことを読み物資料として文章に書き、その冊子ができ上がるまでの経緯も含めて「よろこび」という冊子の中にまとめました。

その冊子ができ上がった時に、父親に読んでもらいました。まさか、自分のことが書かれていると思いませんよね。その冊子を読んだ時、父親の目が真っ赤なんです。「俺と同じような思いで揺れている子どもたちに、しっかりと生きる誇りを育てて生きたいんよ」と話したら、父親は一言、「お前のような先生がおったら、部落の子はうれしかろうな…」そう言ってくれました。その一言が生きる力になります。

いつか、父親母親に、「お前のような息子がおってよかった」と思ってもらえたらと、自分の人生に悔いはないと思います。そういう家族の絆の中で、私たちは生きていると思います。語りが語りを生む。自分を伝える。いろんな思いを聞く。そんなやり取りの中で、私たちは解放されていく。そんな、これからの時間をつくっていきたいと思います。ちょうど１時間半経ちました。10分間休憩します。（拍手）

前半終了

＝意見交換＝

≪コーディネーター　A≫

３人の思い、また、中学生が演じてくれた人権劇など、本当にいろんな思いで観ていただいたり、聞いていただいたと思います。毎年、フロアから様々な思いが語られていきます。これが人権教育の本質だと思います。

「『ひとごと』から『わがこと』へ…。」Ｃ君の話にもありましたが、私は大学の集中講義に何年か担当したことがある中で、大学生のレポートを読み返した時に、やっぱり地区出身の子がおるんですね。

集中講義の中の３日目はみんなに自分のことを語ってもらうんですけど、その時に学生から語られる言葉が、同和地区出身の子にとって突き刺さってくるんですよ。その集中講義の会場には同和地区の人間はおらんという前提での言葉があります。レポートの中に「本当は自分のことを言いたかった。このことが言えたらどんなに楽だろう。」と書いてきました。でも、その事が言えないその場の空気があります。

高校でもそうです。中学校でもそうかもわからん。「本当はこのことが言いたい。このことをわかってほしい」そういう思いが安心して語り合える教室をつくる、関係性をつくる、それが私の仕事なんだと思って、仲間の教師といろんな想いを共有しながら語り合いというものを創造してきました。「自分に何ができるか」ということを自分に問い直す。発信する。中学生集会で中学生が力をもらうのもやっぱりそこなんです。今までずっと心にためてきたものが安心して言える。それを聞いてくれる。そんなやり取りを大事にしていく人権学習の広がっていくことを願っています。そのために歩き続けていこうと思います。

３人のパネリストの１時間半の語り、それをしっかりと受け止めていただいた皆さんのまなざしにやっぱり力がわきます。今、こんな思いが自分の中にわき上がっている、そんな思いを１時間くらいです。みんなで出し合って、このフォーラムを閉めたいと思います。どうぞ手を挙げてください。（フロアから、コーディネーター語りの終了と同時にすっと手が挙がる）

≪フロア　K≫

（真っ直ぐに会場を向き）板野高校１年のＫです。こういう人権の集会というのは、去年の中学生集会から参加させていただいているんですけど、Ａ先生も言っていたように、今年も中学生集会すごかったんですけど、去年の中学生集会も自分たちの言いたいことを言って、泣きながら自分の思いを話してくれる人もたく

さんいるし、私も、弟のことで想いがあって、そういうことについて話させていただいたんですけど、ここでもその話をさせていただきたいと思います。

私の弟は「障がい」を持っていて、ダウン症という病気なんですよ。小さい時はそんなこと全く知らなかったから、弟は「ねむの木療育園」というところに行っていたんです。そういうところでは、こういう子がいるというのは普通なんだと思っていました。

本当に、小さい時から弟ってかわいいし、周りの子とか見ていてもかわいいんですけど、大きくなるにつれて周りの友だちというか、中学生の子たちや私の周りの子たちが、弟と一緒に車に乗っていた時に、ある時狭い道があって、車にぎりぎり通れるところだったんですけど、ある小学校から帰ってくる子がおって、その子が、私たちの乗っている車の中を見て「うわぁ。何こいつ、変な子がおる」みたいな感じのことを言われました。

私は「弟普通だ」と思ったんですけど、それを聞いた時にすごい衝撃を受けて、中学校に入ってきた時に、弟のことやダウン症の子のことを私は何とも思わなかったけど、(思いが溢れ声をつまらせながら一生懸命言葉をつなげ)他の子たちは、「何？あの人たち。気持ち悪い」みたいなことを言って…。人ってみんな一緒なんですよ。

自分とちょっと違うだけで、ダウン症の方だったら、中学校１年生とか３年生でも、身体は中学生なのに頭は小学校３年生ぐらいでも純粋にかわいいのに、周りの何にも思っていない人が、そういうバカにしたりしているっていう現実を、去年の中学生集会で話して、「皆さんどう思います？」って聞いた時に、本当にようけの人が「私もそういうことを経験したことがあります」と言ってくれて、「ああ、自分だけじゃなかったんだ。他にも悩みをもっていたり我慢してきた人がいたんだ」と思って、自分の中で救われたなと思いました。

まだ、ダウン症のことって多分わかっている人や関心を持っている人が少ないと思うんです。(胸がいっぱいになり、あふれそうになる涙を懸命にこらえながら)だから私が思うには、「板野支援学校」というところがあって、体育祭とかあるんです。そういう部分でちゃんと見てほしいなと思います。その子どもたちがどういう思いでやっているのかとか、(あふれる涙を何度も拭きながら、絞り出すように)私がすごいなと思うのが、勉強してちゃんと絵も書けるようになったりとかあるんです。ちゃんと自分でこういうこともできるよということを見てほしいんです。そういうことを気付かせてくれました。ちゃんとそういう部分を見てあげてほしいなと思います。以上です。(拍手)

≪コーディネーター　A≫

昨年の中学生集会の時、彼女が語ったんです。その後次から次へと思いが溢れました。本当にすごい集会になりました。藍住中学校の３年生でした。その後も彼女をずっと見てきましたが、生活が変わるんです。(力強く、精一杯の思いを込めて)人間性を磨いていく、そういう学びだと思うんです。どう生まれるか、どんな状態に生まれるか、生まれは変えることはできません。でも、生き方は変わる。マイナスに思っていたことが大きなプラスになっていく。

幸せっていうのは、私たち一人一人の心が決めていく。知ること、学ぶこと、交流すること。この時間とこの場を楽しみにしながら来てくれる高校生がおる。そんな仲間がおる。人権教育の可能性そこにあるんだと思います。つながっていきましょう。(前の席で真っ直ぐに手が挙がる)どうぞ。

≪フロア　S≫

鳥取県から来ました。Ｓと言います。私は実は、この会に来るきっかけとなったのは、前におられるＣさんと関わりがあります。Ｃさんが2004年にここでパネリストをされた時の映像を頂く機会があって、それを文字に起こしました。その語りを読みながら、「ああこの場に私も居たいなあ」と思ったのがここに来させ

ていただくきっかけでした。

次の年から10年間、毎年来させていただいています。ここに来させていただいて、本当にいろんな思いに気づかせていただいたり、いろんな思いを話をさせていただいたりしながら、この10年間ずいぶん育てていただきました。

ここに来るこの日だけが「鳴門人権地域フォーラム」ではなくて、来年も行った時に語れる自分でありたいなという思いで、地元で1年間が頑張れます。今、地域で同和教育推進協議会の会長をしています。「今年もどういう学習会つくりをしようかな」とみんなで話し合いながら進めています。

先日、うちの地域で、「同和教育を進める中で40年前の原点を振り返ろう」という講演会がありました。その時にお話してくださった先生が最後の部分でこんなことを言ってくださいました。

「大人の努力が子どもを育み、大人の間違いが子どもに反映する」

私たちはどういう学習をつくるかということを考えながら、少しでも子どもと共に育っていける大人の学習をつくっていきたいな、大人も頑張っているんだということを子どもが感じて、お互いが育ち合っていける。そういう場をこれからも大事にしていきたいと思います。

それから、７～８年前になるんですけど、吉野川市の皆さんが倉吉の私の地元にフィールドワークに来てくださいました。その時にいっしょにおいでになったのが、Ｃさんの御兄弟とご両親でした。

ここで、その方々と再会することができて、絆というのは、本当に見えないような細い透明な糸でも、何かの時にお互いがつながり返したり振り返ることができるんだな、もう一度つながりを深め合えることができるんだなと感じます。

この場を１回だけに終わらせず、ここで出会った方々と、どこかで何年後かに出会った時にでも、「あそこで出会いましたね」と語り合えるつながりをつくっていきたいと思います。今日はありがとうございました。（拍手）

≪コーディネーター　A≫

できるだけ多くの人がつながって、いろんな思いを共有できる、そんな時間にしたいと思います。どうでしょうか。はい、じゃあすみません。マイクをお願いします。

≪フロア　K≫

私は、A先生と同い年で、いろんなことを教えていただいています。今日は、A先生の生い立ち等も見られまして、「スダチの苗木」などは、資料として使わせていただいているんですが、私の家も、養豚業をしていまして、それが私としては子どもの時、嫌だったんですね。

（語る自分と対話するかのように）どうして嫌だったかというと、親に残飯集めを手伝わさせられるんですが、それを友だちに見られるのが恥ずかしくて、農業をしているというのは言えるんですが、養豚業をしているということは非常に恥ずかしくて言えなかったんです。

（当時を振り返りながら）僕自身は、父親のことを尊敬していました。A先生と同じで、一生懸命育ててもらって…。「学校の先生になりたいな」と、中学校の頃に思っていたんですが、ある先生が、授業中に生徒を注意する時に、「勉強できん奴は、豚飼いにでもなればいい…。」というようなことを言いまして、無茶苦茶腹が立ちました。

その時には恥ずかしくて友だちには言えなかったんですが、父親のことをこの先生は知っていて、みんなの前で言ったんじゃないかと思って、すごく腹が立ったんです。先生に対してそういうことも言えず、「それは職業差別だろう…。」と言えない自分が情けなかったということをずっと思っていました。１回だけこんな話を聞いたことがあります。父親は、働き過ぎて45歳で過労死…。朝５時くらいから仕事をしていまし

て、車の中で亡くなっていました。

私が大学に入った年でした。絶対教師になろうって思って教師になったんですが、今の教師というのはすごくやりがいがあるし、今日、A先生に話していただいた「子どもと信頼と尊敬の絆」がつくれるような教師になりたいと思っています。

(気持ちを切り替えるように)今日パネリストで来ていただいているCさんの話も、すごくいいなと思いました。私も最近、子どもたちにそういう気持ちを持ってもらうようにしたいなと思っています。不登校とかいろんな問題の中で、保護者の方たちといろいろ話し合う中で、良い高校に行ってほしいとか、良い大学に行ってほしいとか、塾に行っておいたらいいという価値観をすごく感じて、学校がそれに応えようとしながら、限度があるんじゃないかなと感じていて、やっぱり、自分のことを好きになって、やりたいことをやって、しっかりと自分の人生を歩いてもらいたいなと思いました。

それから、Dさんの話を聞いて、ちょっと涙が出てしまいましたが、私にも娘がおりまして、Dさんがお父さんの事を大事に思っているというところ、私の娘は言ってくれないですが、言ってもらえてるような気がして涙が出てしまいました。

それから、「スダチの苗木」の劇、すごくよかったです。ありがとうございます。是非、出演者の中学生に劇を演じてみてどういうふうに思ったか聞きたいなと思いまして、手を挙げさせてもらいました。よろしくお願いします。(拍手)

≪コーディネーター　A≫

ありがとうございました。(鳴門第一中学校の生徒たちに温かいまなざしを送りながら)はい、いこう。

≪フロア　T≫

(誘われるように、父親役を演じた生徒会長が立ち上がり、力強く)まず、劇を演じる前に、僕は部落差別とかについては一応知ってはいたんですが、そこまでではなくて、どうしても「他人事」になってしまうので、今回、「スダチの苗木」の劇で、A先生のお父さんの役を演じさせていただいて、当時の人たちはどんな気持ちで生きていたのかということを、かなり深いところを知ることができました。

それまでやっぱり「他人事」だったんですが、今日の先生方の話を聞いた中で、今日の話を聞いてよかったと思いました。(拍手)

≪コーディネーター　A≫

(ニコニコと)下宿のおばさん、いこう。(コーディネーターの言葉に会場に温かな笑いが溢れる)

≪フロア　K≫

私は、下宿のおばさんを演じさせてもらったんですけど、「スダチの苗木」を演じながら、自分で部落について分かったと勝手に思っていたんですけど、今日話を聞くと、ぜんぜん深いところまで考えられていなかったと思いました。

(一言一言を、じっくりと考えながら)おばさんは「とても良い人」ということなんですが、私は、良い人が部落差別に関する発言をしてしまう理由を「スダチの苗木」の中では、小さい時から部落に対する偏見をすり込まれていたということなんですが、無意識に言ってしまうということは、あまり良い人とは思えなくて、当時は当たり前でも、ちゃんと考えて、大人たちの考えを悪いと思ったら、考え直していける人が良い人なんじゃないかなと私は思いました。(拍手)

≪コーディネーター　A≫

(ニコニコと)治ちゃん、いこう。

≪フロア　H≫

僕は「スダチの苗木」の作品に参加するまで、道徳の時間に人権についての学習をしてきたけど、人権というものに興味がありませんでした。でも、A先生の中学時代からの友だちである治ちゃんを演じて、差別を受けていた人の気持ちや差別を受けていたからこそ、自分たちが教師になって差別をなくそうと努力する気持ちが少しわかってきたような気がします。

この人権フォーラムに参加して、実際に差別を受けていた人たちの話を聴いて、本当に差別があったんだと実感しました。この差別をなくしていくためにも、このような人権フォーラムを続けていく必要があるんだと思いました。(拍手)

≪コーディネーター　A≫

中学生の人間性が本当に染み出た人権劇です。もう、何十回も観ているんですけど、何回観てもこみあげてくるんです。(しみじみと)ついこの間もある研修会でかなり大きなスクリーンで観てもらって、その後しゃべるんですが、父親がじっと１人で「スダチの苗木」を植える場面でこみあげてきて言葉にならんのです。涙が止まらんのです。会場を見たらみんな泣いとるんです。それでまた涙が止まらんのです。長い長い沈黙をつくった講演会になりました。でも、その場が人間を変えるんです。おばさんは本当に良い人なんです。こんな良い人はおらんという人の中に部落差別意識があるんです。

(身体の底からほとばしるように、魂を込めて)それは何かと言ったら、学習がないからです。地区と地区外の交流がないから、つながりがないからです。人を知ったら、人とつながったら、その痛みがわかるから、その悲しみがわかるから、差別意識なんて出ませんよ。

絶対に言ってはならんことがあるんです。してはならんことがあるんです。絶対に言わん、絶対にせん。絶対にいじめたらいけない。絶対にだましてはいけない。人間というのは大事にしなければいけない。尊敬しなければいけない。そういう関係をつくる人権教育というのは、やっぱり社会を変えます。世界を変えます。人間を変えます。

それを、遠くのことで考えたら、「ひとごと」で考えたら、面倒くさいことかもわからんけど、自分に問いかけて、自分の人間性を磨く教育と考えたら、こんなステキな世界はないです。家族が本当に愛おしくなる。仲間が本当に大事に思える。そんな関係をつくっていく学びだと思います。

(そっと、静かに誘いかけるように)つながっていきましょう。手を挙げてください。どうぞ。

≪フロア　男性≫

失礼します。まずは、先ほどの女子高校生の方、ありがとう。今日私は全然言うつもりなかったんですが、今、こうしてマイクを持つ元気を与えてくれたのは、あなたなんです。今日のタイトルが「ひとごと」から「わがこと」へと書いてあるんですが、私は授業していて、本当に「ひとごと」、「もうええわ。俺に関係ないわ」と思う生徒が目の前にたくさんいたりして、非常に悲しいことがあります。

私は教員ですが、教員でもそのように考えている人と私は接してきたことがあります。私も長い間教員生活をしていて、校区の中に同和地区がある学校と、ない学校を経験しています。地区のある学校だったら、目の前に子どもたちがいるからという思いで授業をしているんですけれども、その逆に同和地区のない学校、そこは、同和地区がないのだからかまわないんじゃないかという思いが教員の方にもあったし、子どもたちの方にも、また、親の方にもそういうふうな思いがあることを私は感じました。

私はそこがいけないんだと思いました。特に同和地区があって、その隣の同和地区のない学校に流れてくることがあるんです。そういうところこそ頑張らなければと私は強く思っていたんです。私が授業をする中

で、子どもたちに自分のことだと思わせなければいけないと思って頑張ってきました。

先ほどの高校生が言ってくれたんですけれども、ごめんなさいね。私は外見で第一印象をやっぱり判断してしまいます。だから普通と違っていたら、「ええっ？」と思う自分がいます。中学生で、金髪でピアスして登校してきたら、「何や、こいつ」と思う自分がいます。私はそのことを子どもたちに伝えていくことで、変えて行けるのではないかと思います。

私が授業でよく使うのが、「焼肉みんな好きやろ？じゃあ、想像してよ。牛の肉を切っているところ」そう言うと、必ず出ます。「わあ、気持ち悪い」「その切った手で握手を求めてきたらみんなはどうする？」「わあ、気持ち悪い、嫌や」「でも、それを食べているのは君たちでしょう」という話をします。「私たちは、頭を発達させることによって社会を生きてきたんだよ。人間の武器は頭なんだよ。そのために怒ることもある。笑うこともある。泣くこともある。俺も差別する気持ちがあるんだ。みんなもだよ。」

私は、それを切り口として授業展開をし、私の思いをぶつけていく、そういう授業を心がけています。だから、本当に子どもたちの気持ちをいかに高めていくか。特に、「俺、関係ないわ。それは別の世界のことやろ」そういう「ひとごと」のところから、気持ちを高めさせていくのにはどうしたらいいかなと考えながらやっています。本当に、高校生の発言が私に勇気をくれました。どうもありがとうございました。（拍手）

≪コーディネーター　A≫

どうぞ。

≪フロア　S≫

九州から来ました。Ａ先生とは16年前に出会い、それからは資料を頂いたりしております。小学校の教師をしています。今日はなぜ来たかといいますと、（迷い苦しみながら、精一杯向き合おうとする。自分の思いを精一杯にしぼり出すように）６年生の担任ですが、非常にいじめが多くて、何でこの子たちがつながらないんだろう。ヒントをもらえたらという思いできました。

私は高校生の弟さんに言ったような指導をしてきた教師かもしれません。何でこの子どもたちがつながらないんだろう。本音を言わないんだろうと、ずっと夏休みになってから考えていました。（懸命に自分の心と向き合いながら、絞り出すように）要するに、子どもたちにもっと深く寄り添えなかった自分があるということです。だからこそ、子どもたちが言えなかったのであろうとつくづく思います。さっきの「スダチの苗木」の劇の言葉で言えば、「信じる」「子どもたちを信じる」ということに今日気づかせてもらいました。ありがとうございました。（拍手）

≪コーディネーター　A≫

（会場に向かって）つながっていけたらと思います。どうぞ。

≪フロア　K≫

今日、皆さんの話を聞いていて、前に書いてある「『ひとごと』から『わがこと』へ」というのを見て思ったことが、中学生集会で準備をする時に、部落のことについて話したことがあるんですけど、今の高校生、中学生、小学生の方はあまり関心を持っていないというか、知らない人が多かったんです。なぜだろうと思っていました。

それはやっぱり、教えてくれる人が、本当に部落のことを伝えたいからそういう授業をしているという気持ちがあるのかどうかだと思って、今日ここに来てくださっている先生方とか、中学生とか、保護者の方とか、県外から来てくださっている方とかは、もっと知りたいしもっと学んでいきたいから、こういう場所に来てくださっているんだなと思うんですけど、それ以外の教員の方とかは、本当に興味を持っているのか。

もしかしたら、ここに来てくださっている方にはいるとは思わないんですけど。「生徒が来ているから来た」そういう考えの方もおるかもしれません。

子どもって何も知らないじゃないですか。大人から聞かないとわからないことっていっぱいあるんです。自分たちから見つけなければいけないこともあるんですけど、その中でも、大人の方の力を借りて探すというのも一つの手だと思うんですけど、その中でも、部落のことって全く何も知らないわけであって、教師の方とか、今日来ておられる方とかの話を聞いて、「ああ、こんなことがあるんだな」と私も気づいたというのもあるんです。

授業中って、部落のこととかになったら、やっぱり「ひとごと」になって寝ている子が多いんです。「何でこんなことを俺らがやらなあかんの」みたいな感じで…。それで、最初は聞いて、「私はこう思います」と言って終わりなんです。それってきれいごとでしかないんです。

「わがことへ」となっていったら、先生が「自分はこういうことを思うから、だからこういうことを伝えたいからこの授業をしているんだ」という意志を見せなかったら、子どもだってついていかないと思うんです。そういう気持ちの問題だと思うんです。教師が、「俺は、私は、こういう気持ちでこういうことをやっているんだから」という気持ちがないと伝わらないんです。

楽しい授業って、みんなちゃんとやってくれるじゃないですか。子どもって気持ちの強い人についていきたいと思うんです。だから、部落のことについても、いろんなことについても、「自分がこういうことを伝えたいから」という気持ちを子どもにぶつけていってほしいなと思います。以上で終わります。(拍手)

≪コーディネーター　A≫

ありがとうございました。多くの人が思いをつなげていってほしいなと思います。挙手をしてください。じゃあ、お願いします。

≪フロア　女性≫

(発言した高校生に)ありがとうございました。今日、ここへは(中学生を引率する)先生がいないからということで来たんですが、皆さんの話を聞いて、すごく自分のことを考えるきっかけとなりました。

私は、去年(正式の教員に)採用されまして、今の中学校で２年目です。先生になりたかったのかというと、そうではなくて、どちらかというと先生はすごく嫌いでした。なぜ嫌いだったのかというと、私の父が教師です。しかし、家では何もやってくれないし、私が中学校の時に、ちょっとやんちゃな友だちと遊んでいたとき、私の父は、「そんな子たちと遊ぶな」ということを言いました。私も反抗期だったということあって、当時、その言葉に反抗していきました。

(照れくさそうに)中学、高校の友だちが、私が今教師をしているということを知りまして、「何であんたがやっているの…」ぐらいに、当時学校の先生にはすごく反抗をしていました。(切々と)高校に行く時も、総合選抜制ということもありまして、受験勉強も普通にしていたら受かるということで、高校も、今の立場ではなかなか言えないこともありましたが、友だちと遊んだりして本当にふらふらしていました。

高校を卒業する時には、私は好きな人と結婚をしようと思っていました。その相手が部落の人でした。親に言いましたが、「生活するにもできんだろう」ということで、親は反対しました。私はこの時、「なぜなんだろう。なぜ、うちの親はなぜ場所で反対するんだろう」とわからないままでした。私は反対されたまま、高校は全く勉強していなかったので、生活を改めるということで高松の寮付の予備校に行きました。その高松で、同じ寮で出会った友だちがきっかけで、ちょっと前向きに頑張っていこうと思えました。

その子というのは、今、高校の先生をしているんですが、弟さんが重い「障がい」を持っています。もう、20歳までは生きられないということなんですが、今は30歳です。ずっと車椅子生活で、声も出せないでいます。その高校の教員をしている友だちは、小さい時に、お父さんもお母さんも、その子の弟の介護で付きっ

切りで、その子はほったらかしにされていたと言っていました。小さい時には親に育てられた気もなくて、その子も高校生の時にいろいろやんちゃなことをしていたそうでした。

そこで私は私のことを話すことによって、「私だけじゃなかったんだ」と思えて、その子といろんな話をする中で、「自分も変われるかな」と思えて前向きに考えるようになりました。

でも、教師になろうと思ったのはすごい後で、その間はフリーターもして、いろんなアルバイトとかもして、そこで出会ったいろいろな立場の人の話を聞くことによって、それが、今、私の力となっています。

非常勤講師をする中で、生徒と出会って、生徒がすごく前向きで、ちょっとやんちゃなことをしている子も、自分の話を聞いて欲しいんだなという昔の自分が出てきて、いろんな話を聞いてあげたいなと私は思っています。

うまく話はできないんですけれども、今、教師という立場になって子どもたちがいろんなことで悩んだり、でも、すごく喜んだりする表情を見て、私はすごいエネルギーをもらっています。(いっぱいの笑顔で)また、このような機会があれば、是非来たいなと思っております。以上です。(拍手)

≪コーディネーター　A≫

是非つながってください。どうぞ。

≪フロア　N≫

毎年来させてもらっています。今年で何回目なのかな。かなり来ています。毎回なんで来るのかというと、同和問題について言えば、神奈川では人権教育の中に入ってないくらいです。

でも、先ほど中学生の「下宿のおばさん」が言ってくださったんですが、私も周りから良い人に見られます。自分でも良い人だと思っています。(会場に明るい笑いが溢れる)

学校の教員でしたが、今は退職して学習支援をやっているんですね。そうすると、向こうでは同和問題とかはないけど、すごく、経済格差というか、貧富の差というか、学習支援に来ている子も、塾に経済的に行けないかもしれない。塾だと学校と同じようにやっているんだけど、一部にできない子がいて、入って行けない子があって、一人一人と話していく。その子たちの中にも、お母さんも一緒に漢字の勉強に来られている方もいるんだけど、すごく、経済的に苦しいなというのが目に見えて分かります。

そういう時に、さっき話にあったように、「良い人」なんだけど、自分がちょっとしたことで他人を傷つけるようなことを言っちゃたり、あるいは言わなくてもこちらで感じてしまったりすることがあるんです。

それが差別かどうかというのはわからないんだけど、自分の中ではいかんなと思ったり、他人だけではなく、女房や子どもともそういう場面はたくさんあるんです。それを反省させてくれる場面というのがこちらにあるから来ているんだろうなと思います。大人の方からもそれを頂くし、やっぱり中学生や高校生、自分たちよりも若い世代にすごく教えられます。

私は神奈川県の藤沢市にいますので、この鳴門市の人権地域フォーラムがいつするのかわからなくて、A先生に連絡したりするんですが、こういうネットの時代なので、鳴門市のホームページを見るんです。私は気がつかなかったんですが、前にもあったのかもしれないんですが、今日アンケート用紙に感想を書きますね。あれがホームページに載っているんですね。知らなかったんですが…。

今年、ホームページを見たら去年のものが載っていたんです。それを読むと、その時にここで感じた、「うれしいなあ」という気持ちや「こんな生き方をする人もいるんだ」「ああ、同じように感じている人もいるんだ」という気持ちをいつでも読み返すことができてすごくありがたいんです。全部起こされるのは大変だと思います。どなたがしてくださるのかわかりませんが、是非、続けてください。以上です。(拍手)

≪コーディネーター　A≫

ありがとうございました。つながってください。(すっと手が挙がる)どうぞ。

≪フロア　女性≫

今、鳴門教育大学の教職大学院という所で勉強している者です。阿南市で小学校の教員をしています。鳴門市の人権地域フォーラムに出会ったのは去年のことでして、去年、大学の先生の方から紹介を受けて来させていただいた時に、皆さんの熱い思いを受けて、またコーディネーターのＡ先生やフロアの方の思いを聞いて、何か私も思いを言いたい言いたいと思いながら１年が経ちました。

その時に、「今年も来たい」という、私の心を揺るがすフォーラムが続いているということに、本当に素晴らしい取り組みだなと感じながら、今日も来させてもらいました。そして、このタイトルにもあります「『ひとごと』から『わがこと』へ」ということが、今年のパネリストのお一人お一人の思いと、私の同和問題との出会いとつながる部分があって、「わがこと」だなと感じることがたくさんありました。

例えば、「寝た子を起こすな」という考えのお父さんの話だとか、「部落」「部落」ということが本当にいいのかという迷いだとか、自分も授業の中で部落差別について逃げていた時期があって、それを指摘してくださった人がいたからこそ、私は大学院に入って人権学習について学びたいという思いがあるので、今日につながっているんだなと思います。

今日、高校生の方が「本当に強い思いで向き合ってくれたら、子どもたちはついてくる」と言ってくださった、その一言で、私はこのマイクを持とうと思いました。

私は、「子どもたちにちゃんと向き合ってやっていこう」と思うのに10年以上がかかりました。私は６年生を初めて担任した時に、部落問題について自分から教える自信が本当になくて、違う授業をやってしまったことに、中学校の先生や違う学校の知り合いの先生が、「それは違うんじゃないか」と指摘してくださったんです。そのことを受けて、その時はすごくショックでした。「何でそこまで言われないかんの、ここまで授業やったのに…」と思いました。

でも、よく考えてみると、小学校の卒業段階で部落問題について教えて、中学校へ送るという使命があることに、その時に気づかせてくださったんです。そこから私の人生が始まったように思います。６年生を３回担任する機会があって、その度にフィールドワークをしたりですとか、奈良の水平社博物館も実際に足を運びました。

地域の方とのつながりもあって、今はなかなか行くことはできていませんが、識字学級に行かせていただいてそこからの学びも大きいです。様々な人とつながる機会を持って、自分の考えが揺れている部分はまだまだたくさんあるんですが、そこから学びをまた次の子どもたちへつなげよう。私は今担任を持っていませんし、子どもに今持っている思いを直接伝えることは難しいですが、次、現場に復帰して子どもたちと向き合った時には、しっかり同和問題を伝えて中学校へあげたいと思います。

現場の先生方に温度差があるのは事実です。だから、私は今研究をする中で、多く入ってきている若い先生方に、たくさんの先輩の先生方の力を借りて、同和問題をずっと関心を持っていただいて進めていこうと、そういう取り組みを始めたところです。自分自身もこういった場で学ばせていただいて、たくさんの先生方とつながりあって、人権学習に関心を持ってもらえるように、私ができる働きかけをしていきたいと思います。

このフォーラムも、他の先生にも紹介したんですが、なかなか来てくれなかったので、今からまたスタートで、来年は仲間を連れてまた阿南市から来たいと思います。本当にまた１年間頑張れるという思いで、本当に今日はたくさんのお土産を持って帰れます。また来年来させていただこうと思います。本当に今日はありがとうございました。(拍手)

≪コーディネーター　A≫

アッという間の１時間です。力が本当に湧いてきます。（パネリストへマイクを渡そうとするコーディネーターへ、どうしても語りたいという会場からのアプローチがある。その姿に気づき、進行を止め、その女性に発言を促す）どうぞ。お願いします。

≪フロア　佐藤芳子≫

（「マイク持ってよ」とそばの女性に頼み、立ち上がると力強く）失礼いたします。聞こえますか？聞こえますか？（会場のうなずく様子に言葉をつなげる）私は、今、ここに立たせていただいておりますが、本当に、勉強も何もできていない年寄りでございます。

（一言一言を、身体全体からほとばしるように、ゆっくりと言葉をつないでいく）大正の時代に大阪で生まれ、育った人間でございます。小学校までは、無難に平凡に、まあ、世間の普通並みに育ってまいりました。何の心配もなく過ごしてまいりました。

中学校に入った１年生の時に、私は家が近かったので学校へ歩いて通っておりましたら、友だちは大阪のあちこちから集まって来ますので、ある友だち２人が、電車通学をしておりました。その２人が電車に乗って、学校へ行く途中に、ちょうど電車道からすぐ近くに私の家がありました。その友だちが２人来て、私の名前は中野といったんですが、「中野さんの家はブリキ屋さんやな」と言ったんです。私は、小学校まで、ブリキ屋であろうが、銀行マンであろうが、果物屋であろうが、みんな同じに考えていました。何の違和感もなく過ごしておりましたのに、何か２人からそう言われた時に、胸の中が電気が走ったようになったんです。

なぜなったか、今考えてもよくわからないんですが、何か、潜在意識に、ブリキ屋さんという職人ですね、職人は手仕事で、鉛筆で仕事をする事務員でないから、何か引け目を感じていたかもわかりません。

友だちの家に遊びに行けば、普通の家はお玄関から入ります。そして、客間があったり、子ども部屋があったりして、そこで友だちと遊ばせてもらいました。

私の家は、そのブリキ屋をしていたというのが、父の弟でございます。若くして、兄弟が田舎から大阪へ出てきて、兄弟が同居しておりました。父は勤め人でございましたが、弟が自分の家を改造してブリキの仕事をしていりました。その当時のネオンサインの原図をブリキの板に書いて、例えばミナミの戎橋の所にかける「日本盛」とか、そういうメーカーのネオンサインの原図を書いてブリキで加工する、そういう仕事をしておりましたが、何か恥ずかしい、ブリキ屋は恥ずかしいという潜在意識が走って、とてもショックを受けました。

当時、毎日日記を書いて先生に出すわけでございますが、私はその時、親にも言わず、その日記にショックをありのままに書いたわけです。そして、先生に提出したんです。その時の１年生の担任の岡平すゑという先生は、結婚間なしの若い先生でございましたが、私の日記に、何頁も赤ペンで先生の思いを返してくれました。

今、私の家は、（1945年）3月13日の大阪空襲で焼けてしまって、日記のかけらもございませんけれども、ただ、残っている記憶は、「職業差別」。この４文字は、今から80年も前の話でございますが、私の頭から離れず、大事な心の中の軸として、支えられているわけでございます。

年を取るほどに、民族差別、貧困差別、障害者差別、いろいろな差別に出くわすたびに、私もそういう、岡平先生がコンコンと具体的に書いてくださった１行１行は忘れましたが、職業差別というものの、いかに、いかに、ひどいものか。「そういうことはあってはならん」という先生の信念のかたまりの、あの日記帳のことが支えになりまして、少しずつ、差別ということに鈍感であった私でも、いろいろの事柄に会うたびに、「差別」という一文字が、いつも頭の中を、巡っておりました。

しかし、まだまだ私は、「このくらいの暮らしができていいわ」とか、「旅行もできていいわ」とか、自分を人よりも優位に立つことで、安心することもいくつもありました。

学校に勤めました。結婚をしました。私の主人佐藤文彦は、日常の中で、まず、学校に出て来ない子ども、「雨が降ったら休むんじゃ。困ったことだな…。」と家でも言っておりました。家庭訪問をしても親がおりません。「ここの家、いつ行ったらいいんだろう」日曜日も家におらず、そういう家庭訪問をしておりましたが、そういう日常の中での主人のありようを目の当たりにしながら、私はぼんやりした人間で、なんとなく、なんとなく、差別というものが、一つ一つ、深く深くなっていったように思います。

具体的にはいろいろあって言い尽くせませんが、(一言一言をかみしめるように、力強く)いかに、「自分より以下を求める心」の卑しさ。しかし、人間にはその卑しさが誰にでもある。それをいかにして浄化していくか。これは死ぬまでの勉強でございます。

今でも、私は、意識がなくても差別しているのかもしれません。人間らしさを忘れていることがあるかもわかりません。ただ、意識してないということは怖いんです。無条件に他人を差別して感じない、そういう自分が怖いんです。だから、(力強く)今日は前のパネリストの方々、そして、ご熱心な皆さん方のお言葉、雰囲気に、私はすっかり飲まれてしまいました。

そして、残り少ない人生を、「生きている限り」とよく言いますが、本当に、本当に、(ニッコリしながら)まあ、横文字で言えば「Now」ですね。(会場から温かな笑いが起こる)「今」ですね。今を大事にしないと、せっかくここまでに生きてきた、もうちょっとしたら95歳になります。(会場が驚いたような感動に包まれる中、身体中からほとばしるように)その自分がもったいない。

せっかく皆さんに出会ったこと、この今日の大事な会で、欲張りに、皆さんからお店に売ってない手土産をいっぱいもらって帰ります。何を申しましたか、勝手なことを申しました。どうも失礼いたしました。(会場から割れるような拍手が続く)

≪コーディネーター　A≫

佐藤芳子先生です。鴨島第一中学校の校長先生であった佐藤文彦先生のお連れ合いさんです。ありがとうございました。あっという間に１時間15分が過ぎました。この後、前の３人にしゃべってもらう予定でしたが、時間になりましたので終わります。

(会場から明るい笑いが起こる)これで終わりなんですけど、３人の思いが、本当に溢れました。「今までこんなことはしゃべったことはない。」そんなことを語ってしまう、語らせてしまう、語ることができる。そこから人間は変わると思うんです。

「信頼と尊敬の絆」の中で、私たちはやっぱり幸せになっていくんだと思います。本当に素晴らしい時間をつくっていただいたことに感謝申し上げます。３人のパネリストの皆さん、また会場から語っていただいた皆さん、それをしっかりと受け止めていただいた皆さん、皆さんで精一杯の拍手をして終わりましょう。(会場いっぱいに拍手の鳴り響く中)ありがとうございました。

≪司会者≫

コーディネーターのＡ先生、パネリストを務めていただきましたＤさん、Ｃさん、Ｂさんありがとうございました。続きまして、鳴門市人権教育推進協議会会長が閉会のご挨拶を申し上げます。

≪鳴門市人権教育推進協議会会長≫

(ゆっくりと丁寧に)今日の人権地域フォーラムが本当に素晴らしい会になりました。私もこの会には10回は来ております。その度に感動をもらいながら、「また明日から人権教育に頑張ろう」というような思いにさせていただきます。

特に、コーディネーターのＡ先生をはじめ、３人のパネリストの方々の思いを受けて、それに対して会場の方々からたくさんのご意見を頂戴いたしました。本当にありがたいことでございます。特に「また来年も

来たい」というふうなお言葉を何人もの方から言っていただき、この会を主催しております私たちも本当にうれしいことでございます。本当にありがとうございます。

特に、中学生の皆さんが、一生懸命先生の方に顔を向けて聞いておられる姿、本当に素晴らしいなと思いました。そんな思いの中で何を言っているのかわからなくなってしまいましたが、本当にありがとうという気持ちしかございません。できましたら、また来年もこの会場で皆さんとお会いしましょう。皆さん、本当にありがとうございました。(拍手)

≪司会者≫

これを持ちまして、本日の人権地域フォーラムを終了いたします。今一度、コーディネーターを務めていただきましたＡ先生、パネリストのＤさん、Ｃさん、Ｂさんに大きな拍手をお願いします。(会場から大きな拍手)皆さん、ありがとうございました。

終了

≪参加者の意見・感想≫

◎本当に良いフォーラムでした。幅広い年代からの意見や感想を聞くことができ、自分の考え方の幅が少し広がったと思います。日々、生活する中で、常に人権感覚を持ち、人にやさしく思いやりを持てるように努めていきたいと考えます。ありがとうございました。

◎大きな力がもらえる会です。毎年楽しみにしています。

◎すばらしいフォーラムでした。皆さんのお話を聞けて涙が出ました。いっぱい考えることがありました。また来年も参加させていただきます。ありがとうございました。

◎「ひとごと」から「わがごと」にするために、様々な人々の本音や思いにふれることが大切だと思った。また、この多くの参加者から同じ思いの人々がこんなに多いのかと驚いた。

◎ステージの人々の声もよかったが、フロアーの多くの人々から意見が聞けて、このフォーラムは今後も続けていくべきであると思いました。

◎このフォーラムを体験したくて参加しました。教育にたずさわる者以外にも、こういった取り組みが広がってほしいと思いますが、そのために私は何が「わがこと」にできるのか…。それよりも教育のプロとして差別をなくすための「わがごと」を極めるべきですね。「わがごと」をキーワードとして新たな視点が見えてきます。

◎パネリストの皆さんが熱く本気で語っていることが本当に印象的でした。自分が部落と言うことのエネルギーがどれだけのものか、改めて感じさせられました。まだまだ知識は少ないが、今日熱くさせられた思いを教員として生徒に伝えたい。意識を変えることは難しいかもしれないが、何か考えさせられる、感じてもらえるようにしたい。このフォーラムに参加できて本当に良かったです。

◎先生の「生まれは変わらないけれど、生き方は変えられる」という言葉に心を打たれました。最後の95才の先生の今を大事にする思いにも、大変共感させていただきました。

◎信頼と尊敬の絆、家族で語り合える生活を送っていきたいと思います。本日はありがとうございました。

◎日常の生活にまぎれて、人としての気持ちが失われつつありました。このフォーラムに参加して、また、生き方を見直すことができました。ありがとうございました。

◎このフォーラムまで、何回も「同和問題」などについて学校の学習を通して学習してきました。Ａ先生のことについてや、その他いろいろな話を聞いたりして意見を言ってきました。しかし、今日はその「同和問題」に関わってきた人の話を聞いて改めて「こんなに大変だったんだ」と実感しました。

◎このようなすばらしいフォーラムをずっと続けていただきたいと思います。

◎１年前初めてこのフォーラムに来させていただき、この場の力に衝撃を受けました。また、今年もたくさんの方の思いが伝わり、自分も差別意識があったことを振り返りました。まず、その自分をありのまま受けとめたいです。部落差別を知ろうとしなかった自分、向き合おうとしなかった自分があって、今、部落差別を「知ろう 考えよう なくそう」とする自分がいます。私は教師をしていますが、もっともっと学びたいし、たくさんの方から教えていただきたい。それを子どもにどんどん伝えたい。人権を大切にする文化を多くの仲間とつくっていきたいです。『子どもが「差別をなくそう」という気持ちになれるのは、大人の熱い気持ち…。』高校生が語ってくれたこの言葉は、今日の最大のお土産です。部落差別についてここまでとことん考え、思いを伝える機会はそうそうないと思いました。このフォーラム、来年も楽しみにしています。
◎貴重な話をたくさん聞けて良かったです。改めて人と人のつながりの大切さを学びました。部落差別は中学校の頃から身近に感じず、ずっと納得のいかないものばかりでしたが、今日答えが見つかりました。自己をみつめて、自分を大切にし、人も大切にできることだと思います。一人一人を大切にします。
◎私は今日はじめて「人権地域フォーラム」に参加して「部落差別」について知ることができました。「部落差別」は自分のことではない「ひとごと」だと考えていました。けど、このフォーラムで自分の身の回りの先生などでも「結婚差別」や「職業差別」を受けていることを知り、「ひとごと」ではなく少しでも「わがごと」と考えることができ、すごく貴重な時間だと思いました。また、人権問題について語るきっかけがあるのなら参加したいと思いました。
◎学生から高齢者まで多数参加され、パネラーの意見を熱心に聞かれている姿を見て、人権意識の高い人たちが増えてきたと感じた。人権劇はすばらしく上手にまとまっていた。自分の中の差別心に気づくことの大切さを知った。
◎女子高校生の(障害を持つ)弟に対する思いにすごく感動した。また、子どもは熱い大人についてくるというのはその通りだと思った。なんでも一生懸命になってくれる先生には子どもはついていくと思います。多くの人の発表、意見に感動したし、胸に響きました。私もそんな人になりたいです。来年も絶対来たいです。
◎たくさんの元気をいただきました。まだまだ感動できる自分がいることに喜びを感じています。この会のおかげです。ありがとうございました。
◎人権についてもっと関心を深めていけるよう、仲間をふやすことができるように広めていきたいと思います。
◎これまでにあった差別を知ること。これからの子どもたちにもそれを知ってもらい、やってはいけないこととして学んでもらうことは、学校教育の場でも重要なことだけど、その立場にいない人(自分)にとってもできることはあると思うので、改めて人権の尊重を意識して行動していきたいと思います。
◎多くの方の実体験を聞き、今まで「ひとごと」だったことが「わがこと」になっていかなければならないと思うことができました。ダウン症の弟がいる高校生の女の子の話は、考えるものがありました。仕事でダウン症の子どもを見る機会があるまで、言葉だけしか知らずに「変わっとるなぁ…」「どうしてできんの…」と思ってしまうこともありました。ある日症状について学んだことで、今までの考えが人権を考えていなかったことに気づきました。今回の話を聞いて、改めて子ども一人一人に関わっていき、眼を向けていきたいと思います。
◎皆さん、それぞれの正直な思いを発表され、すばらしいなあと感じました。まだまだ自分の気持ちを人前で言えませんが、皆さんが代弁してくれているような感じがします。今後も皆さんの活躍を心から願っています。
◎今日、この会に参加させていただいて、いろんな方の思いを聞くことができました。家族のことについて話していたり、差別のことについて話していたり、私は聞いていて胸が熱くなりました。中学生の集会とは、また違ったところもあったけど、皆さんが熱いまなざしで聞いているのは全く同じでした。来年もまた参加したいという気持ちになりました。

◎全国からパネリストや参加者が集まるこの会で、地元の中学校の人権劇を見せていただいたこと、とてもうれしかったです。毎年この会でパワーをいただいていますが、パワーをいただくだけでなく、まわりの人たちの力になれるように頑張っていきたいと思います。ありがとうございました。
◎このような場をつくることはとてもいいと思いました。私も昨年から中学生集会に参加させてもらい、このようなフォーラムがあると知りました。今は高校生になりましたが、人権を勉強する気持ちはかわらず、それどころかもっと興味を持っています。私は昨年からの参加なので勉強不足ですが、パネリストをやってみたいと思っています。パネリストさんの話を聞いていると、その気持ちが強まりました。また来年もフォーラムがあるなら来たいと思っています。
◎参加者一人一人が同和問題への関心を深められたと思います。一人一人それぞれが自分にとって何ができるかを考える機会になった。
◎改めて今の自分の立ち位置をどうしたいのか、どうすべきかを見つめ直すことができました。少なくともきっかけになりました。私はいじめの授業、生命の授業、そして人権・同和教育の授業は教師としてのみならず、一人の人間としての使命感をもって、身体をはって正面から子どもたちに向き合って授業をしています。これからも私自身、恥じないような生き方、人として、教師としてやっていきます。本当に今年もありがとうございました。
◎Ａ先生、パネラーの皆さん、心に残るお話ありがとうございました。「スダチの苗木」の中での支え合う友達の存在に気づかされました。Ｃさんの心を満タンにするエネルギー「自分は自分のままで…」は本当に共感します。最後に今日発表してくださった中学生に気づかされ育てられた気がします。勇気のある力のある発言ありがとうございました。
◎人権・同和教育にたずさわる一人として、今日もまた温かいエネルギーをいただきました。自分の取り組みを振り返り、思い直す場ともなっています。ありがとうございました。
◎今まで人権について何をすべきなのかわからなかったけど、今日ここへ来てそのヒントをいっぱいもらいました。まだまだ勉強はしていかなあかんと思いました。今日はここに来れて良い勉強ができました。
◎「スダチの苗木」を作成したことで、部落差別について理解しているつもりだったのが、全然理解できていなかったことに気づかされました。パネリストの方の話や手を上げて話をしてくださる方々の話を聞いて、人権問題についてとても理解が深まりました。今まで他人事だった人権学習を、もっと自分のこととして考えていきたいと思いました。
◎たくさんの人が自分が嫌な思い出を話す勇気はすごいと思いました。人から人へ伝わっていく様子はすごくすばらしいことだったと思いました。このようなフォーラムに参加することは初めてだったので、この経験を親や学校の友だちに伝えていきたいです。
◎初めて参加しましたが、パネリストの方や参加者の方々の部落問題に対する意見を聞けて良かったと思います。人権問題についての考えを今日のフォーラムで深めることができました。今日はありがとうございました。
◎皆さんのいろんな意見を聞いていると、二女が部落の人と結婚したことを昨日のことのように思い出されました。反対はしたけど、子どもたちの意見を尊重して認めた形ですが、今は幸せに生活をしているのを見ると良かったと思います。
◎貴重な話を聞かせていただき、大変参考になりました。また、同じ小豆島の人間として、Ｄさんの話は心に響きました。私自身、本日のＡ先生やパネリストの方々と同じことはできないと思いますが、少しでも問題解決に取り組めたらと思いました。
◎初めてフォーラムに参加しました。参加できて本当に良かったです。発言は恥ずかしくてできなかったですが、いつか発言できる人間になりたいです。これからも頑張ってください。ありがとうございました。
◎良い勉強をさせていただきました。ありがとうございました。

◎人の生き方や思いを語れる場はなかなかないので、このような機会は大切だと感じました。私も若手の教員として、子どもたちに人として大切なことを伝えようと思います。
◎実の父と義理の父が亡くなりました。二人とも最後は意識のない状況が続きました。その介護や看護の中で思ったこと。生まれたときから死のその瞬間まで、私が大切にしている人をどうぞ大切にしてください。私が大切にしている人が大切にされる世の中であってほしい。私が大切にしている人は年寄りかもしれない。意識もないかもしれない。汚いかもしれないけど。病気の人も、障害のある人も、年寄りも、どんな立場の人も、大切にされる世の中であってほしい。その人を大切に思う人が必ずいます。この思いを伝え、このような世の中をつくるために、人と人との関係性を高められるよう学校教育にたずさわっていきます。
◎たくさんいい話が聞けました。自分を見つめ直し、胸を張って伝えられるそんな人になっていきたいと思いました。ありがとうございました。
◎一人一人が人権について他人事ではなく、私も自分から積極的に考えていこうと思いました。
◎今回、このフォーラムに来て、人権に対する気持ちが、今まで以上に深まりました。A先生にこのような機会を与えていただいてよかったなあという気持ちでいっぱいです。今回は発表できなかったんですが、次回来る機会があれば、ぜひ発表をさせていただきたいと思います。中学生として、このフォーラムに参加できてすごく良かったです。先輩方の話ももっとたくさん聞きたいと思いました。ありがとうございました。また来たいと思います。
◎初めて参加したので、どのようなフォーラムかわからなかったけど、皆さんの意見の真剣さが伝わってきました。これからも続けてほしいと思います。
◎たくさんの方の意見が聞けて良かった。自分も頑張ろうと思った。
◎たくさんの人がいろんな想いを打ち明けてくれたので、部落差別をはじめとする人権問題について詳しく知ることができました。
◎多くの人の話が聞けて、人権に関することを深く考えることができました。今まであまり人権について考えることはなかったけど、今回ここに来て、差別にあった人の気持ちを聞いて、自分も考えることが大切だと思いました。また、ここにいる人とのつながりがあればいいと思いました。
◎知らないこと、無意識なことこそ、怖いことはないと思います。
◎「つながること」を大切に思っていましたが、このフォーラムに参加して「信じる」という一番の基本をなおざりにしていたと思いました。学生の素直な気持ちがとてもありがたいと思います。
◎最後のおばあちゃんの語りが、非常に心を打ちました。人間はいつまでたっても向上心を持つことができるし、自分自身の差別意識にも向き合っていけると思いました。私は中学校の教員という立場ですが、生徒の意識を揺り動かすような発言や授業をしていきたいです。本日はお世話になりました。
◎この場で感じる他人だった人の心の痛みが、今後の自分の考えや行うべき方向を導いてくれた気がします。今感じることは、つらさや痛み、苦しみを知ることで心が動く、自分のようにまわりの人にも伝わる伝え方で、人権・同和問題と向き合い、共に助け合い、広げていきたいと思いました。本当にありがとうございます。
◎初めて参加させていただきました。会場全体の想いを全身で感じた時間となりました。思いを話してくれた高校生・中学生、一人一人の言葉に胸が熱くなりました。今までどこか「ひとごと」だった自分にとって、今日がスタートです。ありがとうございました。
◎大変良い経験をさせていただきありがとうございました。まずテーマがすばらしいです。「ひとごと」から「わがごと」へ…、自分を語り、人と人がつながるフォーラムでした。初めての参加でしたが、ためになった学習会でした。お世話してくださった方、A先生、パネラーの皆さん、心に残り、自分を見つめ直すことが少しできたようです。本当にありがとうございました。
◎すばらしい生き方を目指して頑張っていきたいと思います。

◎自分の心の中をしっかり見つめながら、自問自答すること。これからも大切にしていきたいです。そんなことを再確認させられたフォーラムでした。
◎たくさんの方の思いが伺え良かった。「自分の人間性を高める教育が人権教育である」という言葉に勇気をいただいた。家族・仲間を大切にする心をもちたいと思った。
◎本当にありがとうございました。私は私でありたい。私は私でいいんだと思いました。また、来年も来たいです。
◎初めてこの会に参加させていただきました。発言する一人一人の言葉のすべてに、大切な言葉がたくさん含まれており、一言一言が心に刺さりました。一人では気づけなかったことをたくさん感じられました。仕事を始めて、しんどい家庭の子どもに出会い、人権について考えることが増えました。その中で感じていた自分の思い、家庭のしんどさ、今日の話を聞いて悩んでいる人、同じ思いの人がいることを知り、私の力になりました。本当につながり、仲間は大切と思いました。ありがとうございました。
◎皆さまの多くの発言が積極的ですばらしい。「スダチの苗木」は初めて観たが、差別への思いが強く伝わってきた。作品の中で「使命」という言葉が特に印象深い。親子が生命のバトンをつなげていく中で、人間関係の基本となる親子関係の絆の強さを感じた。然してその絆は、人と人とのつながりと同義であるとＡ先生から言われて温かい気持ちになった。
◎毎年、この空気…。この思いの中にどっぷりとつかれることで、癒やされパワーをもらいます。私たちの学校でも私たちの町でも、こんな取組を続けたいとチームを組んで頑張っています。本日は本当にありがとうございました。
◎今回はＤＶＤがありました。ためになる（勉強になる）ＤＶＤであれば何本観ても良いと思います。ただ、全体の時間は２時間が限度と思います。
◎今後、子ども達への立場の自覚について考えさせられた。親子で話す機会を大切にしていこうと思った。
◎こんなに次々と思いを伝えたい人が出てくるフォーラムに今まで出会ったことがない。これだけの熱い空気の中に身を置くことができて本当に幸せでした。人の心はこういう中でこそ変わっていくんだとつくづく感じさせられた。本物の教育のあり方を改めて考えさせられた集会でした。ありがとうございました。
◎私は初めて参加させていただきました。幼稚園児の母親ですが、これから人権問題を勉強する子どもと一緒に話ができればと思いました。また参加したいと思います。
◎人として生まれ育った故郷は心から愛しい。両親はもちろん、兄弟姉妹ももちろん、近隣の人々のふれあい、日常の生活を通じての思い出を大切に生きること。また、生きていく努力が大切で、人と人とのふれあい、励まし合う社会を創造していきましょう。私は、差別を許さない地域社会の構築を望みます。「ひとごと」から「わがごと」へのテーマは大変良いと感じました。
◎「生まれは変わらないけど、生き方は変わる」という言葉が胸に響きました。自分の生き方を見直すチャンスとなりました。また、高校生の生の声、とても重たく、自分が今後どうすべきかはっきりとした目標を見つけられるものでした。私自身も語ってくれた高校生と同じ経験をしました。今、一生懸命生きている私の弟を改めて誇りに思います。いい機会を与えていただきありがとうございました。
◎小学校から同和問題を学んではや30年が過ぎました。心の記憶のどこかにずっと残っていましたが、まだ、差別という現状、部落という言葉が消えないこと、消えていないことが不思議です。でも、それだけ根深い問題であるのだなと改めて感じました。部落だけでなく様々なことで差別が生まれてしまうのですね。ディスカッションでよく分かりました。伝える内容がとても多く広いと思いますが、パネリストの方はもう少し話の内容を順序立ててお話しいただければ、もっと話が伝わると思います。後もう少しゆっくりの口調で話していただければ、聞き取りやすいです。年配の方は聞き取れないそうです。
◎「店屋に売っていない…」まさにその通りです。売っていないからこそ、大切な思いやりや情け、つながりを感じました。ありがとうございました。

◎日々の仕事に追われて感じることのできなかった、できていなかった人権問題への意識、考え方を振り返ることができて、有意義な時間となりました。つながりってとても大切だと思いました。
◎Ａ先生のお話の中に「いい人であっても部落差別の心を持っていることがある。でもそれは学習していないから…」私は教員という職業を持っているから同和問題について学習してきたけれど、同じ年代の人はそういう学習はしていないので、やはり学習をしていくことは大切だといつも思います。また、Ｄさんのお話の中で、「自分の目標は父を解放すること」とありました。私の父の世代もそうです。家でそういう話になったときに、それは間違った考えだと思っているけれど、親には言えないことがあります。だからこそ本音で私自身が変わって話をしていきたいと思います。
◎今年初めて参加したが、来年も参加したいと思わせる内容であった。今回も県外からの多くの参加者がおいでており、半日だけの開催ではもったいない気がしました。こういう会の輪がどんどん広がっていくことを心より願っています。私の教員生活は、県下でも最大の被差別部落を抱えた学校がスタートでした。それが教員生活30年弱の礎となりました。改めて新鮮な気持ちで考え、心をクリアにさせてもらえた気がしました。ありがとうございました。
◎子ども達のしっかりした考え、思いを聞けて大変感心しました。自分の子どもがどうすれば、このような思いが持てるようになるのかと思います。このような本音で話せるフォーラムはずっと続けてほしいです。いつか子どもと参加したいです。
◎高校生の女の子の話にもあったが、やはり「相手のことを知る」ことで相手への思いやりや優しさが生まれてくるのだと思う。教師をしているが、これからも「ひとごと」ではなく「わがごと」として人権教育(体験を重視した)をしていきたい。
◎心を新たにすることができました。自分自身、仕事のことやいろいろな面で差別的な言葉を言われたことが多くありました。次に出席する時は、自分の考えをまとめて表現したいと思っています。
◎本年度の案内が職場に届いた日から、ずっとこの会に来ることを楽しみにしていました。それは、パネリストのＣさんです。彼と出会ったのは、彼が高校生の時でした。そのとき彼の様な子が地元の先生になってくれたら、多くの子ども達、保護者、地域の人たちが、力をもらえるだろうと思いました。そして、12年ぶりの今日、彼はますますしっかりと成長した姿を見せてくれました。人権を通した人のつながりは、職場を離れても時間を超えても、つながり合っていけるものだと改めて確認しました。このような機会を持つことができ感謝しています。
◎Ｓさんや高校生をはじめとしていろいろな方の発言の中にあった「大人の努力が子どもを育てる」という意味の言葉で、「大人が子どもと真剣に向き合って育てていかないと…」という責任を改めて感じました。